

ファンタシースターポータブル オリジナルストーリーズ

きりの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グラール太陽系…そこに数多存在するスペースコロニーの内の一つ「クラッド6」。

そこでニート同然の生活を送っていた少女、エミリアは、働けと連れ込まれたレリクスで不思議な少年「ネロ」と出逢い、強引にパートナーに設定されてしまう。

「記憶が無い」と語るその少年の過去とは？

そして、エミリアの明日はどっちだ。

目次

プロローグ	1
1st universe 翼を抱いた少女	
1話 幸せからは程遠い	3
2話 襲撃者	7
3話 傭兵	12
4話 スタテイリア	17
5話 ゆりかご	25
6話 出会いと遭遇	30
7話 悪夢	40
2nd universe 黒衣の破壊者	
8話 初陣	49
9話 序章	56
10話 獣人	62

プロローグ

——それは、遙か遠いところのお話し——
母なる太陽と三つの惑星を持つ、グラール太陽系。

そこに住むヒューマンと、彼らから生まれた「機械人」^{キャスト}「超人」^{ニューマン}「獣人」^{ビースト}は、外宇宙から飛来した謎の生命体「SEED」^{シード}による襲来^{しゅうらい}を受け、滅亡^{めつぼう}の危機を迎えた。

しかし四つの種族は心を一つにして戦い、激しい攻防の末、これを封印した。

それから三年——

グラールには、SEEDとの攻防の傷跡^{きずあと}が未だ深く刻まれ、資源枯渇が深刻な問題になっていた。

外宇宙への移動を可能にする亜空間航行理論が提唱され、再興の道を大宇宙への大規模な移民計画に求めた。

政府、軍、3惑星中の企業は結束し、亜空間航行の実現化に向けて動き出していた。

グラールの新しい未来を願って——

惑星モトウブ。砂漠や荒野はもちろん、未開の地も多く、三つの惑星の中でも特に環境が厳しい星だ。そのとある地方。

辺り一面砂漠のこの地に今、二人のヒューマンの少年がいる。

一方は死にかけ倒れ伏している。左右で色の違う目が特徴的な若く、背の高い男だ。髪の色や服装から黒のイメージが強いが、あちこち血の赤に染まっていて、そのイメージも薄まっている。意識は既にほぼ無く、まさに死の一步手前といったところだ。無理もない。元々満身創痍だった少年は、不幸にも、たった今殺されようとしていたのである。

もう一方は勝ち誇り、高笑いを上げている。年齢や背格好は同じくらいだろう。後ろで結ばれた銀の長髪に赤く鋭い両目。黒のコートを裸の上半身に直接羽織っているのが特徴的だが、これは彼の拘りだ。彼こそたった今殺人を犯そうとしていた張本人である。その右

手に握る血のように赤い剣が、妖しく光を放っている。

「フン、どうやら命拾いをしたようだな…」

彼にはその少年を殺す理由があった。憎く、腹立だしく、忌々しい。それを差し引いても、自らの計画の障害となる可能性のある少年なのだ。

どういわけか既に疲弊し、手負いだった彼を追い詰めることは容易く、引導を渡す一歩手前。

しかし、状況は一変。一般人に目撃を許してしまった。遠くから手を振り聞こえてくるその声が、その少年の救世主となったのだ。この砂漠のど真ん中で、何故?とも思ったが、それどころではないし、ともすれば殺す訳にもいかない。今日立ってはならないのだから。

「…が。問題は無い。手ならある。」

そう。状況は予想に反してこちらにとって好都合だった。嬉しい誤算は、もう一つあったのだ。

彼はにやりと笑みを浮かべると、倒れる少年の耳元に寄り、

「今回は見逃してやろう。だが次に会うことがあれば今度こそ貴様には死んでもらう。覚えておくがいい。私の名は——」

風に砂がよく巻き上げられる夜のことだった。

1st universe 翼を抱いた少女

1話 幸せからは程遠い

民間軍事会社リトルウイングの社員、エミリア・パーシバルは機嫌が悪かった。

いたいけな乙女16歳を仕事と称していきなりこんな危険なところへ連れ込むとは、一体どういう見だろうか。

民間軍事会社リトルウイングの取締役、クラウチ・ミユラーは機嫌が悪かった。

いつまでも働く気を見せねえから楽な仕事を振ってやろうというのに、この穀潰しはたかがレリクスで一体何を騒いでいるのだろうか。

二人はその主張を食い違えたまま現在地レリクスに到着するまでの約2時間、激しい論戦を繰り広げた。今では「帰りたい」と「ダメだ」の応酬になっている。

「レリクス」とは、いわゆる旧文明の遺跡である。

「旧」とは言うが、それは一度何らかの原因（一説にはSEEDとも）で滅んだゆえにそう呼ばれるだけで、そこに見え隠れするテクノロジーには、今のものより優れているものが多く存在する。

今、学者達を賑わせる「亜空間航行理論」に通ずるものもあるとかで、その研究は非常に盛んなのだ。

したがって、その遺跡たる「レリクス」の調査も、最近増えている仕事の一つ。危険が伴う仕事（クラウチはおままごとと笑うが）の為、リトルウイングのような会社から傭兵が呼ばれることも少なくない。

今回は特にフリーで活動しているような者まで招かれ、集合場所に指定された入口すぐのこの広間は、腕利きの傭兵達でごった返していた。ニュースでよく見るような顔もある。

故に、ニート少女エミリアは目立っていた。160も無い身長に、学生服を改造した赤いセーラー服とローファー、サイドテールにしたブロンドのセミロングなど、どこをどう見てもこの場にそぐわない。

首にはヘッドホンなんかかかっている。散歩にでも来たのだろうか。

そんな訳で注目を集め始めている彼女なのだが、当の本人にしてみればそれどころではない。

彼女は一刻も早くここから帰りたいのだ。

「本当に危ないんだって!!ね〜やだー!!帰りたいよ〜!!」

言っただけでいるが、なんとなく主張が通らないのはわかっている。そもそもクラウチには「レリクスが危険である」ことを全く納得頂いていないのだ。それはもう、口にタコができそうなほど説明したが、聞く耳すら持ってもらえない。結局、こんなのは「ニートが駄々をこねている」ようにしか映っていないのだろう。だからと言って折れてやる訳にもいかないのだが。

「つたく、少しは働きやがれ。」

それももつともなのだが。エミリアも言い返しづらくなってしまふ。

「ここは安全だから、今からおめえ用の仕事をもらってきてやる。ウロウロしたりするなよ。いいか?こ・こ・こに・い・ろ!」

クラウチはびしやりと言いつつ、人混みの中に消えた。

かくして傭兵少女エミリア（装備：ヘッドホン）は一人になってしまった。

あんなクラウチでもいなくなると心細い。当然ながらリトルウイング以外の傭兵なんかには知り合いないのだ。

集会所となったこの広間は、本当にただ空間が空いただけのような場所で、ちよつとしたパーティーができそうな広さの他には、奥の部屋へ通じる扉しかない。

レリクスそのものの場所が海底にあるため（故に海底レリクスと呼ばれる。安直。）、天井には円形で小型の天窓がいくつも空いており、そこから自然光が入るようにはなっているが、海を挟むため仄かなものである。

その代わり柱に光粒子フォトンを流すことで発光させており、実質的な光源はこちらになる。

フオトンは柱だけでなく部屋のいたるところに流れており、それだけに不思議な模様を刻んでいる。黒を基調とした壁面に青いフオトンの流れるこの部屋は、施された装飾も相まって神殿のような神秘的で厳かな印象を受ける。エミリアは、なんだか生きた心地がしなかった。

「やだ…」

消え入るような、今にも泣き出しそうな声で。

「ごっ、やだよ…」

誰にともなく呟く。

ともすれば背筋の凍るような部屋に、エミリアは一人だった。周囲の他人など騒音でしかない。

飲み込まれるような感覚に吐き気がした。

しかし、

「うっ…!?!」

それは頭痛だった。それも頭が割れるのではないかと錯覚するほどの。

感じていた精神的な吐き気とは全く別のモノ。

まるで外から力を加えられ、ギリギリと締め付けられるような。そんな痛み。

呻いて、うずくまる。立つてはいられない。そして、

ゴゴツと低い音を響かせ、突然地震が起きた。

大きな揺れはその一回だったが、完全に収まることは無く、ゴゴゴと唸るような地響きが続く。

部屋中のヒト達が騒ぐ、叫ぶ。危険を、脱出を。

見た目以上に頑丈につくられたレリクスは、崩れるような気配は無い。

が、入口の開けっ放しになっていた扉が、ゆっくりとだがひとりのに閉じようとしているのだ。扉の開閉はそもそも自動としてプロگرامされているようで、当然調査に来た傭兵達にコントロールする術はなく、閉じてしまえば脱出はできない。屈強な傭兵達が一斉にその入口目指して駆け出す。そうして一つしかない入口はあつという間

に渋滞になった。

それでも元々ヒトが4人は並んで通れるだろうという大きさだ。閉じるスピードも非常に緩く、どんどんヒトが流れ出る。多少揉めこそしたが、何とか全員通れそうだ。めでたしめでたし、と

原因不明のゲリラ頭痛が去り、エミリアが事態に気付いたのはその頃だった。

あれだけたくさんさんの傭兵で賑わっていた広間にはもう片手で数えるくらいしかいない。それも扉のそばで避難を呼び掛けている男と、今まさに扉から出ようとしている数人だ。

「え……ええっ!」

自分でも間の抜けた声だと思う。

驚きこそしたが、状況がわからぬほど馬鹿ではない。閉じゆく扉の隙間はおよそエミリア一人分。そこまでの距離5メートル。走ればまだ間に合う!!無理矢理奮い立とうとしたエミリアだったが、

先ほどの頭痛のせいか、はたまた未だ続く地響きのせいか、足がすくんで立つことすらできない。

扉のすぐそばで避難を呼びかけていた男が気付いた。

「君…何をしているんだ!!早く出よう!!」

必死に呼びかけながらこちらに駆けてくる。

「あ…うん…でも、足が…!」

すると男は「ええい!クソ!!」と言うが早いかエミリアを抱きかかえてしまった。

「え、うそ、ちょ 「うおおおおおっ!!」

細身でありながら、がっしりした体格のその男は、エミリアを軽々抱えて駆け出す。

「い…いったい何なのよ、あんた!」

「見捨てちゃいけないんだ、僕は!!」

男はヒト一人抱えてなお、速かった。

が、出遅れたことに変わりはない。目の前に踏み込んだ時にはもう紙1枚分の隙間しかなく。

無情にも、2人を残して扉は閉じた。

2話 襲撃者

叩く。殴る。蹴る。押す。引く。

「…ダメだ。ビクともしない。」

男が顔をしかめる。

「…本当に、閉じ込められちゃったんだ…」

エミリアも俯く。どうしてこんなことに。

気付けば地響きは止んでいた。とはいえ扉も閉じたまま。

何とか脱出できないかとその鋼鉄の扉を相手に頑張っていたところである。

「けど傷一つつかないとはね…」

「あー、もう！だからレリクスなんて嫌だったのに!!あのおっさん…!!」

静まり返った広間に声が反響する。

考えてみたら、エミリアは腹が立つてきた。無理矢理連れて来ておいて、置き去りにするなんて。許せん。こんなたいけな乙女を一人で、なんて…つと。一人じゃなかった。

「そういうえば…さ。もしかして…あんた、あたしのために逃げ遅れたり…してる?」

「…あー、いや 「ごめん!!」

「そんな、気にしないでいいって。」

男は笑ってなだめる。

考えてみれば、彼は扉のすぐそばで脱出を呼びかけていたワケで。エミリアにかまったりしななければ問題なく、余裕で脱出できていたはずなのである。

…なんか、めっちゃくちや居心地悪い。

「でも…、何で、そんな…あたしなんかのために…」

すると、男は何だか困ったような表情を浮かべ、

「うーん、なんて言うか…癖…かな…?」

「…は?」

「ああいうのを見ると、『見捨てちゃダメだ!!』って僕の体が叫ぶような

気がして。今も考える前に手が出た。」

「変なの…」

「よく言われるよ…」

ははは…と苦笑いを浮かべている。

よく見れば、本当に変わった男だ。

身長はかなり高い。180も半ばのクラウチと同じくらいかもしれない。歳はエミリアと同じくらいだろうか。人種はヒューマン…だと思うのだが(消去法)、体調が心配になるような色白で、目は青い右目と赤い左目のオッドアイである。服装はかなりボロボロでくたびれた戦闘用と思しき赤いスーツに、これまたボロボロの金の装飾がついた黒の上着を羽織っている。もう一般的な部分が黒の短髪と顔立ち(整っているとは思う。別に好みではない。)くらいしかない。

何だか頼りない。彼の印象はそんな感じだった。

それでもエミリアは何となくほっとしていた。本当に一人で閉じ込められたりしたら一体どうなっていたことか…

「つて、え?先に進むの!?!」

入口だった扉は閉じているが、反対側の扉は開いたままだ。男はどうもそちらへ歩き出そうとしているようで、

「うん。もしかしたら、あっちにも出口があるかもしれないからね。」
それは確かにそうなのだが…しかし一人になりたくないエミリアにとつて、彼がこの部屋を出て先に進むと言うことは…

「ここ、未開のレリクスなんだよ?すつつつつつごい、危ないんだよ!?!」

「だから僕達が集められてたんじゃないか。僕だって傭兵だよ?大体、ここにいるのも仕方ないしね。助けもいつになるかわからないし、そもそも僕どこにも所属してないし、助けてもらえるかどうか…」

「そ、それもそうだけど…」

「君はここで待ってて。もしかしたら助けが来るかもしれないし。」

あー、もう。仕方ない。

「ま、待って!い、行くから!あたしも一緒に行く!!」
すると男は眉を寄せて、

「いや、君はここにいた方が…」

「やだ！無理！一人は無理!!ぜったいついてく!!」

「わ、わかったよ…いいよ、一緒に行こう…」

言っってしまった…けど、とりあえずよし。超不安だけど仕方ない。

無理矢理勇気づける。あんなんでも一応傭兵らしいし。もうどうにでもなれ!

「あ、そういえば、あんたの名前…聞いてなかったね。」

「あー、そうだね。ごたごたしてたから、うっかりしてたよ。」

そして少し照れくさそうに、

「僕はネロ。ネロ・ポーラン。」

「ネロ…ネロね!あたし、エミリア。エミリア・パーシバル。」

「よろしく、エミリアさん!」

「呼び捨てでいいって!」

「そう?そ、それじゃあ…エミリア。よろしくね。」

「よろしく…よし。それじゃあ早速…」

突如、叫び声が部屋に響いた。

今しがた向かおうとしていた、先へ進む扉の向こう。仄暗いその空

間からグオオオという、そのものずばり、獣が吠えているような唸り

声が響いてきた。それも一つではない。一つが吠えると他も吠える。

群れを表す連鎖だった。先ほどの地震のせいだろうか?やたら殺気が

が籠っているように聞こえてならない。

「これはどうも、おだやかじゃないね。」

「なにになに!?なんなのよーっ!?!」

レリクスだろうが廃墟は廃墟。原生生物げんせいせいぶつの一匹や二匹、棲み付いて

いてもおかしくはないのだ。わかっではいた。しかしそれと心の準備

ができるかは別の話だ。「傭兵」として登録されてこそいるが、エミ

リアは戦闘経験が全くないのだ。だからといってこれだけ殺気立つ

た声を上げる群れを無視もできないだろうが。心臓が破裂しそうだ。

「君、戦える?」

「うええ!?…えーつと…い、一応、武器は持ってます…けど…」

決して戦えるとは言わない。とても言えない。となればまずい。

非常にまずい。

丸腰で熊にでも出会ったと想像してみても欲しい。当然逃げればよい。否、逃げるしかない。聞くところによれば、目を合わせたままゆっくり後ずさりしていくのがいいのだとか。

今だって同じことだ。逃げればいい。戦えなくたって勝てなくたって逃げればいいのだ。

ところで逃げるための後ろの入口は固く閉ざされてしまっている訳なのだが、どう逃げればいいのかだろうか。もちろんそんなこともあろうかと、武器はあるのだが…とても戦えるとは言えない、と堂々巡りである。

「よし、とりあえずそれ出して。構えるだけでいいから構えておいて。そして僕の後ろから離れないように。」

「う、うん。」

言われた通りにするしかない。エミリアは震える手で自分の左足太ももにつけたナノトランサーを起動した。

ナノトランサーとは、言わば収納装置。小型の亜空間を生成し、ここに手荷物を収納する。武器を多く持ち歩く傭兵はもちろんのこと、買い物帰りの主婦の皆様まで御用達の現代社会になくしてはならないモノである。

エミリアは拳^{こぶし}大でピンク色のボタンのような形状のものを三つ持っていて、内二つは両袖に一つずつ。もう一つが今起動したもので、左太ももに白いベルトで固定してある。

そこからエミリアは、自分の長杖^{ロッド}を取り出した。

ネ口はというと、上着の肩の装飾がそうだったようで、そこからエミリアの身長くらいはあるだろうという長剣^{ソード}を取り出した。武器の刃もフォトンで形成するこの御時世^{ごじせ}に、見たことも無い片刃の実体剣。長さの割に細く、緩いカーブを描く刀身^{あや}が妖しく光っている。

構えながら、ちらりとこちらに目をやりながら言う。

「不思議な長杖^{ロッド}だね？」

エミリアの物も確かに珍しいものではあるらしいが、今はそんなことはどうでもいい。どうせ使い方もよくわかっていない(鈍器くらい

にはなるだろうか？」のだ。

「あ、あんたに言われたくないんだけど…」

どうにか受け答えしながらネロの後ろに隠れるようにつく。嫌な汗が背を伝い、使うつもりのない長杖ロッドを握る手に力が籠る。そして、

襲撃者達しゆうげきしやたちが、荒々しく部屋に突入してきた。

3話 傭兵

部屋になだれ込んで来たのは、奇妙な生物の群れだった。

頭が鮫の半魚人はんぎょじんのような生物で、腕の先は刃物のように鋭利なヒレになっていて、数は6。真っ赤な目をギラつかせながら、鋭く並ぶ歯をむき出しにして皆吠えている。

「何だい、アレ!？」

見たことのない異様な生物に、ネロが驚いて叫ぶ。

エミリアも同じく驚愕の声を上げたが、その姿には見覚えがあった。

「エビルシャーク!じゃない!?ウチの会社のデータベースで見たことある!惑星パルムの海辺を生息地とする比較的大人しい原生生物:だとか。」

「…アレが『大人しい』んじゃ世も末だね。」

引き攣ソドつたような笑みを浮かべながら、ネロが首を鳴らしながら長剣を構える。

興奮するエビルシャーク達は既に臨戦態勢りんせんたいせいで、エミリア達を「敵」と捉え、今にも襲い掛かって来そうだ。

さて、自分で言うのもなんだが、ネロには1対6を強いるようなことになるワケである。

「ね、ねえ…本当にやるの?」

「やんなきゃ殺されちゃうよ、あの勢いだと。」

背後で震えるエミリアをちらつと振り返り、ネロは柔らかに笑みを浮かべる。そして、

「大丈夫。僕は絶対に君を見捨てないから。」

戦いの火蓋は切つて落とされた。

戦わなければ生き残れない。1対6なんて無理だと、嫌だと、泣いて喚いても通用しない。生き残りたければ、戦い、勝つしかない。

戦ったことのないエミリアにも、現状含め、それはわかっていた。自分が直面しているのは、そういう戦いなのだと。

しかし、蓋を開けてみれば、それは「戦い」ですらなかった。

次々に襲い掛かるエビルシャーク達が、このネロという男の鮮やかとも言える剣裁きによって片っ端から切り刻まれてゆく。腕を落とし、頭を落とし、残った体を真つ二つ。6体いたエビルシャークは、その全てが、あつという間に30の肉片となってしまう。刃物のようなヒレの一振りも、鋭い顎の一撃も、ネロに加えることができずに。こんなものは「戦い」とは呼べない。一方的な虐殺である。

エミリアはポカンとしてしまった。目の前で何が起こったのかよくわからない。

「ふーっ、残念。止まって見えたよ。」

何故かつまらなそうなネロが息ついたのを合図に我に返る。

「すっごい…すっごいよ…何なの？あんだ…？」

「そんなに驚かないですよ…これでも一応、傭兵なんだよ？」

ちよつと拗ねたように苦笑いを浮かべる彼は、確かに先ほどから一緒にいる傭兵である。

「これが…『傭兵』…」

「一応聞くけど、けがとかないよね…？」

「あるワケないじゃない…」

エミリアは、また足の力が抜けてしまった。生きてるのに生きた心地のしない、不思議な感覚だった。

「あたし、生きてる…？」

「何を言ってるのさ。」

尻もちをついたエミリアに、ネロが手を差し伸べる。その手をとろうとして、その手を見て、先ほどの映像が蘇る。エビルシャーク達を虐殺する姿。容赦の無い刃の閃き。手が止まる。まるで彼の手から冷気でも出ているような、体の芯が凍りつかされるような、そんな感覚に襲われる。しかし、

「ほい。」

ネロがエミリアの手を掴む。その人肌が持つ温もりを感じて、エミリアの手にも力が籠る。そしてフラッシュバックした映像を振り払い、立ち上がる。

「あ、ありがとう。」

「いいって。けど、大丈夫?」

「うん、平気…なんか、ほっとしちやった。あんたがいれば、とりあえず安全ぽいね。」

「あのくらいなら、どうにかね。ところで、」

「ここでネロはすこし眉にしわを寄せ、

「君って、傭兵、なの?」一応武器は持つてるみたいだけど…」

確かに。傭兵として呼ばれる場でこのさまである。当然の疑問か。エミリアだつて来たくて来たワケではない。

「えー…つと、一応、傭兵として軍事会社に登録はされてるんだけど。戦う気とかはもともと無くつて。ここにも、無理矢理連れてこられただけのの。」

「無理矢理?」

「そう。あのおっさん、あたしが働かないからつて無理矢理連れ出して、こんな危険なところへほっぽつて。」

ん?なんかだんだん腹が立ってきた。今めちやくちや理不尽な話してないか、あたし?」

「あー、もう!こんなか弱い女の子を一人にするなんて、ひどいと思わない?」

「そ、そうなんだ…確かにそれはひどい…かもね…」

「でしよ!?やっぱりそうだよね!確かにあたしも、仕事をえり好みして何もやってなかったけど、いきなりこれはひどいもんね!つて、どうしたの?顔が引きつってるよ?」

「え?…あ、いや、ははは…ひどいね、本当、うん。」

「とにかく、あんたがいれば無事に帰れるような気もするし、おっさんには後で文句言いまくつてやる!SEEDはもういないからレリクスは安全だーとか言つて、あたしの話なんてこれっぽっちも聞いてくれないんだから。そりゃあ、確かに今までのレリクスはSEED襲来しゅうらいがあつたときばかりに、機能を覚醒しゅうせいさせていたよ?」

エミリアの言葉に真剣さが帯びてゆく。口元に手を当て、自然と目まで瞑り、続ける。ちなみに聞いているネロはあつけにとられている訳だが、彼女がそれに気づく気配はない。

「でも、全部が全部そうだったかっというところ、そういうわけじゃなかったんだよね。一説によると、SEEDが散布する素粒子に反応して起動してるみたい。だけど、同時に磁場の乱れも観測されるから、どうもそれだけじゃないと思うのよね。そもそもSEEDは三年前に一掃されたはずなのに、こうしてレリクスは起動してるワケでしょ。レリクス自体が何らかのプログラム管理である以上は、トリガーとなるものも、それに準じた…あ。」

そこでエミリアはようやくハツとした。自分の悪い癖だ。目の前で聞いていたネロは、口が半開きになっている。まずい。またやつてしまった。

「え…ええつとー…」

何と続けたらいいやら。エミリアがどもっていると、我に返ったらしいネロがやつとのことで口を開く。

「あー、詳しい、んだね?」

その気遣いは心に痛い。顔から火が出るかと思った。

「じよ、常識!常識でしょ!?!こんなの!傭兵なら誰だって、このくらい知ってて当然なの!!」

思わず逆ギレしてしまう。声が部屋に響き渡る。何でこんな話したんだあたし。

「いい、今の説明は忘れて。どうせあたしが何言ったって、誰も信じてくれないんだし!」

そうだ。あたしなんかの言葉が信じてもらえるはずがない。おっさんがそうだったように、世間知らずの戯言だって笑われる(クラウチの場合、笑ってすらいなかったが。)に決まってるのだ。それなのに夢中でべらべら喋ったりして、全くバカみたいだ。

そう思っていたのに。

「あー、いや、疑ってる訳じゃないよ。いきなりだったからちよつと驚いちゃって。僕は信じる。」

「…へ?」

「だから。君が今説明してくれたこと、信じるよ。確かに、僕も少しレリクスを甘く見ていたかもしれないね。」

耳を疑った。信じてくれる…？それはエミリアにとって、一大事だったのだ。

「でも、なんで…？あたしなんかの？」

「自分で喋っておいてそれはないと思うけど…まあ、そうだね。実際こうして起動したレリクスに閉じこめられちゃってる訳だし。信じないのもおかしいかなって。説明も理にかなってるように聞こえる。それに…僕には否定できる『モノ』が無いから。」

ここで、ネロは少し、悲しそうな、寂しそうな顔をしてずっと目をそらす。それがなんだか、エミリアは気になって、

「否定できるモノが無いって…どういうこと？」

思わず聞き返す。

するとネロは、その目をもう一度合わせて、

「うん。僕、記憶喪失なんだ。」

4話 スタテイリア

「記憶…喪失…でも、あんたさつき…」

「うん。全部綺麗に忘れてしまってる訳じゃないんだ。戦い方は体が覚えてるし、武器の扱いやなんかも、どういうわけかはつきり覚えている。でもそれ以外はさっぱりで…当然レリクスとかSEEDとかも、よく知らないんだよね。だから、信じられる。否定できる知識もないからね。」

ネロがにつこり笑顔で言う。

「そっか。なんか、あんたも大変なんだね…」

記憶喪失。いまいちピンと来ない感覚だが、逆に言えば、想像もつかない苦労があるんだと思う。それに、エミリアは嬉しかった。自分の話を真面目に聞いてくれるヒトは久しぶりだった。だから……

「あ、ありがとう…」

「何でお礼?」

「いいの!それより、とりあえず先に進もう?こんなところ、早く脱出しなきゃ。」

クラウチに対する不満は、いつの間にか綺麗に無くなっていた。

レリクス内の探索は、意外とスムーズに進んだ。

もちろん、その功績のほとんどは、ネロのものだが。

起動したレリクスの中は罠だらけで、扉をくぐる度にレーザーやらビームやらが飛んでくるし、先ほどのように棲み付いてしまった原生生物達は襲い掛かってくるし、更には備え付けの自立起動兵器まで動き始める始末だった、が。

飛んできたレーザーもビームもネロが長剣で弾いて防ぎ、すかさず銃口を切り落とすし、原生生物も自立起動兵器もみじん切り。

そんな訳でエミリアは後ろをついて来ただけなのであった。

そうこうしている内に、二人はまた、開けた部屋へ来た。

「…ねえ、まだ出口は見つからないの?」

かれこれ一時間。歩いてても歩いてても似たような部屋ばかりでエミリアはうんざりしていた。唯一の救いは、部屋ごとに入ってきたもの

の他には扉が一つしかなく、確実に奥へ進めているという確信を持つことだが、こう先が見えないのでは結局精神的にも体力的にもしんどいエミリアなのだった。

「大分歩いたし、そろそろあってもいいと思うんだけどね…」

引き換えネロの方はピンピンしている。アレだけ戦闘をこなして一体どこからその体力気力は湧いてくるのだろうか、と見ているエミリアは余計にどんよりしてくる。

「しっかし、また随分大きな部屋に出たね。」

言われてエミリアも後ろから見渡す。この一時間で、新しい部屋に入る時にネロの後ろに隠れて入るのがすっかり習慣になってしまった。

「本当だ。あたし達が最初に入った部屋に似てるね…って、げっ。」

丁度円形になっているこの部屋を見渡して、エミリアは気づいた。気づいてしまった。

部屋を囲むように多数設置されているこの巨大な物体は…

「こ、このまわりに見えるの、全部大型の自立起動兵器じゃない…？」

先ほどから相手をしていた小型のものが、動物や砲台をイメージさせられたのに対して、今周りを囲んでいるものはヒト型である。大きさは比ではない。ネロの身長のは倍はあろうという巨大なものだ。レリクスのあるゆる仕掛けが起動している中、不気味に静かなのが気になる。エミリアはなんだか、こちらを見られているような気さえしてきた。

遠くはあるが一応、正面にまた別の扉が見えてはいるのだが…

「ねえ、早く抜けよう？こんなのが動き出したらって考えると…」

この大きさにこの数だ。さすがのネロもたった一人で平気へっちやらとはいかないだろう。考えただけでもぞつとする。

「うん、そうだね…戦う必要がないならそれに越したことは無いし…ここはひとつ、スルーさせてもらおうか。」

ごもつとも。そんな訳で失礼しまゝすなんて扉に向け歩き出した、その時。

ゴトン！という音と共に、11時の方向から1体、2時の方向から1体、件の巨大自立起動兵器が動き出した。

黒とベージュの装甲に覆われたその体は、手足が直接繋がっておらず、体から溢れるフォトンが繋いでいる。巨大な肩は上にせり出し、五本の指はその先が鉤爪のように獯猛に尖っている。体に埋もれるように設置された頭部から二つの光が、目が覗く。地に足をつけると背からこれまた巨大な重ね刃の斧を取り出した。自立起動兵器は、レリクスなら大体設置されている、文字通り自動で稼動し、戦闘する兵器で、侵入者の排除を目的としていると見られている。それが目の前で武器を取り出したのだから、少なくとも素通りさせてくれるつもりは無いようだ。

「ちよつ、じよ、冗談でしょ!?言つたそばから動き始めないですよ!」

エミリアは震えて声を上げる。なんとなくわかつてはいたが、本当に動き出すなんて。しかも二体。自立起動兵器なんて銘打っているが、その様子はどことなく生物臭く、当の二体も斧を振り回して唸りを上げている。目と思しき光がはつきりところらを捉える。

今度こそ死んだ：そんなことを真つ白な頭にぼんやりと浮かべる。が、

「大丈夫だよ。エミリア。」

またしても。ちらりとこちらを振り返り、笑みを浮かべながらネロが長剣を構えて言う。

「大丈夫：って、戦う気!?!」

驚き上ずった声で叫んだ。確かにネロは強い。だが、目の前の自立起動兵器達は先ほどから蹴散らしているものとは明らかにレベルが違う。ましてそれを二体。

「戦わなくちゃ。勝つてここから脱出しよう。」

安心させようとしてくれているのか、相変わらず笑顔を向けてくれているが、なんだか強張っているような：顔色も悪いような気がしてくる。

エミリアは戦ったことが無い。だからここまで戦闘はネロに任せてきた。今だってそうしようとしている。ネロもそのつもりだろう。

しかし、本当にそれでいいのだろうか？

エミリアは戦ったことが無い。しかし全く戦うことができないワケではない。使い方もうろ覚えだが、武器は持っているのだ。

『大丈夫。僕は絶対に君を見捨てないから。』『だから。君が今説明してくれたこと、信じるよ。』

ネロの言葉が、不意に脳裏に蘇る。エミリアは、武器に手をかけた。「わかったー…あたしも戦う!!」

「…は？」

きよとんとこちらを振り向く。エミリアはネロの横に立ち、続ける。

「あたしも戦う！逃げてちゃダメだから…あたしも戦えるから…それに。」

震える手で構える。敵を見据える。

「あんたの『大丈夫』って言葉、あたしも信じたい。だから…戦う!!」見得切って何だがめちやくちや怖い。大体迷惑かもしれない。足を引く張る予感しかないし。しかしネロは、そつとエミリアの腕に触れると、

「僕が前で注意を引き付ける。君はその援護をしてくれ!」

また一度微笑みを顔につくり、ネロが走り出す。戦いが、始まった。

「たあああああああつ!!」

ネロが両手で持った長剣ソードを全力で振りかぶる。

ガキーン!!

それを自立起動兵器スタテイリアが斧で受け止める。何でも真つ二つにしてきたネロの一太刀である。そうとうな強度の斧らしかった。

そしてその隙に、すかさずもう一体が切りかかる。しかしネロは、自らの攻撃を防いだ斧に足をかけて跳び、宙返りして躲けて見せた。空を切る斧が、ドズウン!!と地を鳴らす。

戦いは、そんなことの繰り返しだった。自立起動兵器スタテイリアの方はパワーはあるが巨体のせいか動きが鈍く、機敏さで勝るネロがどうにか二体相手にしているといった構図だ。ネロも何度か斧を掻い潜って攻撃を当ててはいるが、いずれも全く効いていないワケでは無いようだ

が、装甲にはじかれてしまっている。このままではヒトの身であるネロがバテてしまう。つまるところジリ貧だった。

故に決心したエミリアが長杖ロッドを構える。長杖とは、生物の精神に反応する物質、フォトンを利用して攻撃する武器の一種で、フォトンテクニクを媒介に魔法と呼ばれる様々な現象を起こして攻撃したり、補佐したりするもの。とことんうろ覚えのエミリアの知識はそんなところだった。

『不思議な長杖だね?』と、初めてエミリアの長杖ロッドを見たネロは言った。無理もない。七枚の羽を円形に配した杖頭が特徴的な長杖ロッド、名を「クラリータ・ヴィサス」とある生物を素材にしており、持ち主を選ぶとも言われる代物だが、エミリアにはどうでもいいことだった。そもそも使い方すら怪しいのに…

「確か、振って呪文、だったよね…?」

とりあえず言われた通り、ネロの右に立つ自立起動兵器ステイリアめがけ、振ってみる。炎で攻撃する魔法テクニクがあったはずだ。呪文は確か…

「ふ、ファイア…」

しーん…

そりゃわかってはいたが。煙の一つも上がってくれてもいいのではないだろうか。

「振り方が悪いのかな…それとも音量…?ファイア!ファイア!!ファイアー!!!」

静寂。いや、ネロの戦闘音はけたたましく鳴り響いているが。

「…足を引つ張るとか以前の問題だわ…」

なんだか泣きたくなってきた、その時。

ネロと戦闘していた一体がこちらに気付き、ネロがもう一方と組み合っている隙にエミリアに切りかかって来た! 巨体が、斧が迫る。

「うわわわわっ!!」

間一髪、半分倒れるように横に跳び、斧の一撃を躲す。空を切った斧が床を抉る。背筋が凍った。

「う…嘘でしょ…?」

遠くからネロが戦っているのを見ているのと、間近で対峙するのは

全然違った。足がすくんで立ち直れない。ネロが声をかける。

「エミリア!!クソツ!!」

助けようとこちらに走ろうとしたようだが、向こうの兵器が妨げる。歯噛みして剣を振るい、また声をかけてくる。

「一度距離をとって攻撃するんだ!!エミリア!!お願い!!動いて!!」

何だかその声は泣きそうに聞こえた。見捨てないと、大丈夫だと彼は言った。エミリアはそれを信じたいと思った。だからこうして戦うことを決心したのだ。それなのに。

「う、う…うああああああああ!!」

エミリアは震える足で無理矢理立ち上がった。そして自立起動兵器がもう一度振りかぶったのを見て全力で距離をとる。

ネロがまた叫ぶ。

「いいぞー!さあ、攻撃するんだ!!」
でも。

「そ、それが、出ないの!!『ファイア』って唱えても何も出ないの!!」
攻撃を躲し、また一撃を加えながらネロが叫ぶ。

「もつとちゃんと炎をイメージして振るんだ!それから呪文が違う!」
いいかい、『炎よ』だ!!」

そ、そうだったの…炎だからってつきり…

ロッド長杖を構え直し、燃え盛る炎をイメージして振り、叫ぶ。

「炎よ!!」

次の瞬間、ゴオツと目の前の空気が燃え上がり、拳大の火の玉が生まれ、自立起動兵器目がけて飛んだ。そしてたった今斧を空振りし、無防備だった頭に直撃し爆発する。

「やっ…た…」

頭部を失った自立起動兵器が倒れる。沈む。

「やった…!!」

そして丁度その時、ネロが戦っていた方がバラバラになって爆発するのを見た。よくよく考えてみれば元々一対二で均衡していた戦いである。当然と言えば当然だろうか?すかさず長剣をナノトランサーに収納し、こちらに駆けて来る。

「エミリア!!大丈夫!」

「あ、う、うん…あたし…生きてる?」

ぞくぞくと実感が湧いてくる。今度は喜びに体が震える。

「やった…!やったよ!!あんなでつかいのを倒しちやった!!」

ネロも少し青ざめていたが、エミリアが無事なのを確認するとほつと息をつき、その場に座り込んでしまった。

「よかった…!本当によかった…」

「すごい!本当にすごい!あんたを信じてよかった!やった!やったあ!!」

エミリアは喜びを抑えきれなかった。溢れ出て来る喜びは口にするだけでは足りず、ぴよんぴよん跳ねた。実感して、噛み締めて。

そう、だからこそ気づくのが遅れた。頭部を失ってなお、よろよろと背後で立ち上がる自立起動兵器スタテイリアに。

「えっ…」

時間が止まったような錯覚を覚えた。物音で振り向いたエミリアが見た時には、その鉤爪が振り上げられたところで。それがそのまま振り下ろされた場合、真下にいるエミリアは…しかし、

それより前にエミリアの体は反対側から突き飛ばされた。あまりの急な展開に何が起こったのかわからなかった。だがエミリアが元々立っていた場所に、何かを突き飛ばしたような格好のネロを見た時、

「うそ、やだーやめて!!」

だがそんな訴えも虚しく。鉤爪は振り下ろされ、その腕が、体が、真つ赤に染まっていく。

鉤爪を振り下ろした勢いでまた自立起動兵器スタテイリアは倒れていた。今度こそ動く気配は無い。エミリアは全力でネロの元へ駆け寄った。

ちよつとした血の海が出来ていた。その中心にネロが沈んでいる。体は引き裂かれ、既にぴくりとも動かない。あつという間に涙で視界が滲んでいく。こんな、こんなことって。

「やだ…やだよ…どうしてあたしなんか…かばって…」

そうだ。彼は言った。言ってしまったのだ。『見捨てない』と。

「起きてよ…起きて！起きてっば!!」

血もなにも省みず体を揺する。こんなにも、こんなにも軽いなんて。

「どうして?…どうしていつもそうなの!?みんなあたしを置いて行っちゃおうの!?!」

やっと…やっとまた、出会えたと思ったのに。

「あたしを置いていかないでよ!…ひとりにしないでよ!…お願いだから…目を開けてよ…!」

胸が潰れるかと思った。

「誰か、誰でもいいから!助けてよおっ!!」

必死の叫びも薄暗い部屋に吸い込まれていくようで。そして、エミリアもまた、意識を失った。

5話 ゆりかご

少年、ネロ・ボーランには、いつも見てしまう夢がある。奇妙な夢だ。

見知らぬ白い女性の機械人^{キヤスト}が、深い闇に沈んでゆく夢。しかも、夢の中ではどうやらネロとそのキヤストは知り合いらしいのだ。

ネロは記憶喪失である。故に、そのキヤストが単に夢の中の登場人物に過ぎないのか、はたまた忘れてしまった誰かなのか、わからない。少なくとも、夢の中の自分にとっては大切なヒトのようなのだが。

ああ。またこの夢だ。

沈んでいく白いヒト。手を伸ばして、僕に助けを求めている。

僕も必死で手を伸ばす。そのヒトの名を叫ぶ。それは僕の口から出ている声のハズなのに、名前のところだけ曇ったように聞き取れない。

この手が届くことは無い。伸ばせば伸ばすほど、距離だけが離れていく。僕は泣いた。泣き叫んだ。それでも届くことはない。そして

ネロが目を覚ますと、見知らぬ天井が広がっていた。

妙な夢に叩き起こされたせいか、頭がぼんやりして働かない。ここはどこだろう？

ネロはとりあえず、体を起こしてみることにした。かけられていたらしい薄手の毛布が滑り落ちる。どうやら自分が寝かされていたのはソファだったようで、

「オウ、気がついたネー！」

突然、上から声をかけられた。

少し驚いて、ネロの口からも「えっ、」と声が漏れる。

そのヒトもまた、見知らぬヒトだった。寝ていたネロを見下ろすような体勢でソファの傍に立っている。人種はキヤストだろう。白い女性のキヤスト。だが、夢に出てきたヒトとは別人だ。おしとやかなイメージのあのヒトに対して、とても派手なイメージ。緑色の肩まである髪にはウエーブがかけられ、大きな花飾りがついている。服装は

少々露出のある黒いレースつきの白いワンピースで、ともすればなんだか水商売を連想させるような見た目のヒトだった。かなりグラマラスなボディラインだが、キャスト特有の機械的なツヤが素肌にあり、なんだかちぐはぐな印象を受ける。……正直ちよつと残念だ。

ネロが眠い目を擦りながらそんな（一部失礼な）ことを考えていると、

「チヨト、待ッテテネ。」

と当のキャストさんは少しなだめるような調子で続けて後ろを向き、

「シャツチヨサン、シャツチヨサーン！お客サン、起ツキシタヨー！シャツチヨサンも起ツキシテヨネ！」

と少し声を張り上げて、誰かに呼びかけた。片言というか、不思議なイントネーションで話すヒトだ。何だか調子が狂う。

話しかけた方から低く唸るような返答が返ってきたのを確認すると、その女性キャストはまたネロに向き直り、

「お客サン。『リトルウィング』へヨウゴソ。」

なんて、呑気に話し始める。

「ワタシ、チエルシー。ヨロシクネ。」

「あ、はじめまして。えっと、ネロです。ネロ・ポーラン。よ、よろしくお願いします！」

言われて、ネロも慌てて立ち上がり、挨拶を返す。

「はい、ハジメマシテネ。礼儀正しいヒトで気に入ったヨ。今後ともご指名ヨロシクネ！」

ご指名つて。やっぱりそつちのヒトなんじゃ…とネロは邪推してしまう。

だんだんと頭も働いてきたネロは、やはりここがどこなのか気になる、部屋にも目を向けてみる。チエルシーと名乗ったこの機械人キャストさんは『リトルウィング』と言ったか。小さなオフィス…といった体裁から察するに、会社名、だろうか？個別にコンピューターのついた小さなデスクがいくつか並び、それぞれで従業員らしきヒト達がカタカタと音を立てている。天井など空いた空間には、いくつも地図のような

ホログラムが浮かび、光の点がそこかしこでチカチカしている。奥の一番大きなデスクにはピンクのジャケットを着た大男が座っており、なにやら通信機器に怒鳴っている。

「ここは……一体何なんですか？」

と、そんなきよろきよろと見回すネロに、クスツと笑うと、傍のモニターに手をかける。

「ココはリゾート型コロニー『クラッド6』」

チエルシーの操作でモニターの画面に星の瞬く宇宙が映り、そこに一つのスペースコロニーが浮かび上がる。巨大な2つの輪の中央の空間に流線形の本体を通したような見た目をしていて、2つの輪と本体はそれぞれ5本の等間隔の支柱のようなもので繋がっている。

「これが、『クラッド6』……」

「その中の民間軍事会社『リトルウイング』の事務所ナノ。」

「軍事会社の事務所……？ どうして、そんなところに僕が？」

「アナタ、シャツチョサンがエミリアと一緒に連れてきたお客サンネ。いままでずっと寝ていたのヨ。ぐっすり、すやすや。寝る子は育つって感じダツタネ。」

なんだそれは。結局どういうことなんだ、と。ん？ エミリア……？ ネロは何かにひっかかり、そして、

どっつっつ、とさつきまでの出来事が、まるで溢れるかのように蘇ってきた。

レリクスに閉じこめられたこと。エミリアという不思議な少女に出会ったこと。そして……

「そうだ、そうだよ、どうして僕、ここに……？ 僕、死んだはずじゃ……？」
思わずネロの口をついて出る。そうだ。僕は死んだはずだ。無我夢中でエミリアをかばって、攻撃を受けた。体を引き裂かれる感覚。忘れ得ぬ激痛。生きていられたとは思えない。しかし、今こうして話して、動いている。体に不自由は無く、痛みも無い。死後の世界、とかも考えたが、最近の天国には軍事会社なんてものがあるのだろうか？

と、ネロが勝手に混乱していると、

「おうおうおう、面白いぐらいワケがわからないって顔してるな。」

先ほど奥で通信していたピンクジャケットの大男がやって来た。

「俺は、クラウチ・ミュラー。この軍事会社『リトルウィング』を取りしきってるモンだ。」

低い声で、物腰柔らかかに話し始める。が、目が伸びきった前髪に隠れて見えない。口元も髭に覆われ、言っではなんだがかなりむさい。人種は…耳の形から察するに獣人ビーストだろうか？つと、挨拶を返さねば。

「あ、えーつと。」

「ネロ・ポーランドろ？聞いてたぜ。さて、軍事会社といっても肩書きだけでな。やってる事はそこらの便利屋とたいして変わらねえ。要人警護とか、廃棄プラントの調査とかシヨボいもんばっかりさ。」

少し自嘲気味に笑って続ける。

「で、この前あったレリクスの調査。そこにもたまたま参加してたつてわけだ。いろいろあって、レリクス内に閉じ込められたバカを救出するつとー任務に切り替わっちまったけどな。」

「えーつと、つまり。」

「そう。そのバカがお前さんだよ。しかも、身元の確認もとれないと来た。しょうがねえから俺が引き取る形でいったんここまでご招待、つてわけよ。」

「それは、ご迷惑おかけしました…。本当に、ありがとうございます。」

なんとも情けない話だ。しかしクラウチと名乗る男はなだめるように笑みを浮かべて、

「気にすんな。こつちもわりと下心があるからよ。」

「はあ。下心、ですか。」

やはり、救出料とかだろうか？いやいやそれよりも。

「えつと、でも、治療してくださったんですね…これ？すごい技術ですよ…傷跡一つないなんて。それに、あの、一緒にいた女の子は…？」

一番気になっていたことを質問する。が、クラウチは首を傾げ、

「傷だの治療だの何のことを言ってるのかわからねえが、お前さん、外傷は無しって話だったぜ？それと、そのエミリアってガキのことなら気にすんな。アイツは今…。」

と、言いかけたところで、ネロの背後の扉から短いコール音が響く。事務所への来客だろうか？クラウチはそこでいったん話を切ると、

「おっ、ちようどいいタイミングだな。さっさと入れ！」

と呼びかける。応じるように扉が開き、ダルそうな様子で見覚えのある女の子が現れた。というか、あの子は――

6話 出会いと遭遇

「あのさ、おっさん。今日ぐらいカンベンしてよ。」

左右に開く扉を開けて入って来たのは、金髪、赤服の少女…というか、エミリアだった。

やたらダルそうに現れた少女が、ダルそうに口を開く。出会ったときと余りにテンションが違うので、見間違いではないかとネロは目をパチクリさせた。そういえば傭兵として軍事会社に登録はされてると言っていたような気がする。チエルシーとの会話で名前が出てきてまさかとは思ったが、ここだったのか。

「あたしがどういう状況だったか、知ってるでしょ？」

「知らねえし、興味もねえからカンベンしねえよ。」

どうにも元気の無いエミリアだが、クラウチは動じる様子もなく、ばつさり切り捨てる。やはり知り合いのようだ。…にしても僕の憶測が本当なら、クラウチはエミリアの上司になるんじゃないかととてもそうとは思えない態度だけど。なんだか親子みたいだ。

「それよりお前、客の前でそんなツラするんじゃないやねえ。」

「……えっ?」

クラウチの声が少し潜まる。エミリアもはっとしてネロに向き直り、

「あつ、は、はじめまして!……って、どこかで見たような?」

とぶつきらぼうに挨拶をし、顔を覗き込む。

「え……う…えええええーっ!? あんたは……!!」

ネロに気付いたようだ。驚くのも無理はない。

「やあ、エミリア。よかった…無事だったんだね。」

とりあえず再会の挨拶を。しかし、

「い……生き……てる?……なんで、生き……生きてるの!?!なんで、おっさん!?!」

…それどころではないようだ。

「勝手に他人を殺すんじゃないやねえよ。お前、ほんと適当なことしか言わねえな。」

「ていうかおっさん、生きてるの知ってたんなら、教えてよ!」

エミリアが今度はしかめっ面になる。本当に表情が豊かな子だ、とネロは微笑ましい気持ちになる。

「でも、よかった……よかったあ……あたしも気を失ってて、気がついてみればここにいたしき……」

胸をなでおろしながら呟く。

「あそこで起こったことってぜんぶ、夢だったんだ……よかったあ……」

「えつと、夢って……?」

「あー、いや、ごめん。あたし、変な夢見てたみたいでさ。てつきり、あんたは死んだんだと……」

夢……夢、か。それなら確かに死ぬワケはないが、果たして本当にそうなのだろうか……? 僕達は同じ夢を見た、と、そういうことなのだろうか……?

ネロは疑問に思ったが、実際自分は生きているし、考えてもわからないので、そういうことにした。

ネロが考え込んでいると、今度はクラウチが、
「やっぱりお前ら知り合いだったんだな。」

と、なにやらにやにやししながら呟き始める。

「よーしよーし、狙い通り。エミリアも懐いているみたいだし好都合だ。」

「狙い通り? 好都合?」

エミリアが疑問の声を上げる。しかしクラウチはそれを意に介さない。

「お前さん、フリーなんだろう? 丁度いい、このままうちの会社に入っちゃまえ。」

「え!?!」

「はあ!?!おっさん、急に何言ってるの!?!」

予想外の提案にネロとエミリアが一斉に声を上げる。するとまずクラウチはエミリアに向け、

「お前とは話してねえよ、黙ってる。」

「またもやバシツと切り捨てる。反論できないエミリアが悔しそうに唸って静かになったのを確認すると、またネロに向き直って話し始める。」

「うちは確かに小さな会社だが、お前みたいな経験者にはボーナスもはずむぜ？今なら、いないよりはマシ程度のパートナーもつけてやるよ。」

「へー、めずらしく太っ腹だねー。」

少し驚いた様子の子のエミリアが結局口を挟む。するとクラウチは呆れて、

「何他人事みたいな顔してんだ。お前のことに決まってるんだろ。」

「ええっ!？」

「どうだ？試験もなしで、パートナー付きの仕事だ。わりと破格の条件だと思うぜ。」

会社に所属する。それは、記憶を失ってワケもわからず自分の腕っぷしだけで稼いできたネロにとって、無かった発想だった。悪い話では無いだろう。生活もひとまず、安定してくれそう。ならば断わる理由は無い。

「はい！僕でよければ是非！」

「なんだか胸が躍るような感覚を覚える。クラウチもニヤツとして、「よーし、決まりだな！よろしく頼むぜ！実はすでにお前用の部屋も用意してある。おい、エミリア。コイツを居住区に案内してやれ。パートナーなんだから、仲良くな。」

少々乱暴に言い付け、エミリアにカードキーのようなものを渡す。どうやらいよいよクラウチの言った「下心」とはこのことだったようだ。準備が良すぎる、とネロは心の中で苦笑いした。

するとエミリアはまたムツとして、

「ちよつとおっさん！パートナーとか勝手に決めるな！あたしの意見も聞いてよー！」

と異議を申し立てる。するとクラウチが今度は静かに威圧するように、

「……ほお、お前、それはつまり一人で働きたいってことか？」

と返す。ネロも会って間もないがそれは無理だと思った。エミリアにも自覚はあるようで、

「う……そういうわけじゃ……」

と弱腰になる。クラウチもイライラしたように、

「偉そうなクチは一人で稼げるようになってから叩け！おら、命令だぞ！返事は！」

と追い立てる。敗北を悟ったエミリアはしばし唸ると、

「はあ……わかったよ。それじゃ、あたしは先に居住区の入口に行ってるから……」

と言い残し、トボトボこの事務所から出て行った。

「……つたく、返事ひとつマトモにできねえのか、あいつは。」

「シャツチョサン、怖い顔するからネ。もつとやさしくしてあげるとイイヨ。」

見かねて口を挟んだのはチエルシーだ。ネロから見ても、確かに少しエミリアに対する当たりがきついように感じる。エミリアの態度に問題があるのもわかるが、これでは延々といがみ合うばかりだ。

「なんでロクに働きもしねえ社員に優しくしてやんなきゃいけねえんだよ。」

「あの子も疲れてるんですよ。お気持ちはわかりますが、もう少し優しくしてあげてもいいんじゃないですか？大事な家族じゃないですか。」

ふて腐れてぼやくクラウチに、ネロもつい口を出す。文句は多いとは思いますが、それにしてもかわいそうだと思う。それに家族、というのは記憶を失っているネロにしてみれば、憧れの響きだ。大きなお世話かもしれないが、大事にして欲しい。

そんな風に考えていたネロだったが、

「ハッ、とびきりの冗談だな、そりゃあ！」

クラウチが嘲笑するかのように一蹴する。

「勘違いしているようだから言っておくぞ。俺とエミリアは、家族でも何でもねえ。ただの上司と部下の関係だ。」

えっ、とネロは声を漏らす。確かにはつきり言われた訳ではなかつ

だが、エミリアの態度を見て、てつきり親子か何かなのだと思っただのだ。

「そんな、ツレナイネー。シャツチョサンは、あの子の保護者でもあるのに。」

「ツケのかわりに、お前ともども押し付けられただけじゃねえかよ。」
「お店がつぶれる直前まで来てくれたのシャツチョサンだけヨク。ワタシとエミリア引き取ってくれて感謝感謝ネ。」

家族でこそ無いが、なんだかワケアリのようだった。と、話が脱線しつつあることに気付いたクラウチが、

「あー、話がすすまねえな。ともかく、俺とエミリアは家族なんかじゃねえ。だが、書類上、俺はエミリアの保護者ということになっちまってるってわけだ。」

めんどくさそうにまとめに入る。

「そうでなければ、ロクに働きもしねえうるさいだけのガキなんてとつくに放り出してる。」

「仕方ないヨー。最初は誰でもわからない事だらけヨ。」

「そこでだ。お前さんの第一の仕事はエミリアのお守りだ。」

「……お守り、ですか?」

ネロはなんとなく話が見えて来た。

「タダ飯喰らいじゃなくなる程度に使えるようにしてやってくれ。それでいい。後は好きにしてくれ。」

……これか。これが下心の正体か。エミリアが「懐いている」ことを気にしていたのはそういうことだったのだ。つまり、「働かないけど、放り出せない事情のある社員の世話」を押し付ける相手を探していた、と。……これはまた、手強そうだ。斬れば済む分、自立起動兵器スタテイリアの相手の方が楽かもしれない。

そうは言っても、別にネロはエミリアが嫌いな訳ではないし、それでここにいられるなら断る理由もないのだった。だから、

「わかりました。なんとかやってみます。」

「おう。じゃあ、あとは頼んだぜ。」

ネロが承諾する返事をする、クラウチはまた自分のデスクに戻つ

ていった。見届けたチエルシーが静かに話し始める。

「シャツチヨサンはああいうけど、エミリアはいい子ヨ。」

「……ええ、わかってるつもりです。」

「仲良くしてもらえると、ワタシもウレシイ。あの子もウレシイ。みんなウレシイ。」

「なんだか夢を見るような口調だ。そしてネロは、ふと巨大自立起動兵器スタテイリテアを倒した時のエミリアの笑顔を思い出し、

「もちろんです。約束しますよ、チエルシーさん。」

「フフ：チエルシーでいいわヨ。…さ、さ、お客サン。エミリアは居住区の入口でお待ちヨ。レディを待たせちゃいけないネ。」

「…っと、そうでしたね。…チエルシー。」

にんまりするチエルシー。なんだか少し照れくさいネロだった。

「ところで、居住区の入口というのは…」

「事務所を出ればわかるわヨ。広間の左手ネ！」

ネロの肩をポンポンと叩いて自分のデスクに戻るチエルシー。ネロも礼を言つて出ようとすると、

「あーっと、ちよつと待て。ネロ、お前だ。」

クラウチが自分のデスクから話しかけて来る。なんだろう？と軽く返事をして向かうネロ。

「なんででしょうか？」

「パートナーカードだけ登録させてくれ。社員登録すんのに必要だよ。ついでに、俺と交換してくれ。」

クラウチが持っていた携帯を差しだしてくる。ネロは困惑した。

パートナーカードとは、身分証のようなものだ。誰もが個人IDに紐づけて持つことができ、名前と連絡先を載せて名刺のように交換することもできる（パーソナルカードではなくパートナーカードという名前なのは、ヒトとの繋がりを円滑にする目的があつたからとかなんとか）。データとして管理されていて、携帯に入れて持ち歩くのが一般的だ。この半年間、幾度となく要求されたりしたもので、ネロの記憶にも新しい。クラウチの要求もわかる。が、これもまたネロが抱える問題の一つで、

「えっと、実は持ってないんです、パートナーカード。」

「は？持っていない？何言ってるんだ、お前。」

眉根を寄せるクラウチ。しかし、数秒の後、ハツとして、

「すごいやお前、身元の確認がとれねえって話だったな。妙だとは思ったが……どういふことなんだ？」

それはこつちが聞きたいところなのだが、さて、どう説明したものか。

「どうして持っていないのかは、わかりません。実は僕、記憶喪失で：半年ほど前より以前の記憶が無いんです。目が覚めた時には、自分が誰かもわからなくなっていて、持ち物も長剣ソード一本でした。他には、何も。」

「記憶喪失……だったって、名前は覚えてんじやねえか。」

「つけてもらったんです。その時助けて頂いたヒトに。本当の名前は……わかりません。」

するとクラウチは、しばらく腕を組んだまま黙り込んだ後、

「そうか……わかった。一旦こつちでなんとかしよう。」

「なんとかって……大丈夫なんですか？」

「おう。」

「……わかりました。ありがとうございます。」

「気にすんな。それよりお前……いや、なんでもねえ。エミリアんとかへ行ってやれ。」

そう言っただけクラウチはまたデスクに向かう。ネロも軽く声をかけて、エミリアのところへ向かうことにした。

事務所を出たところは五角形の広間になっていて、それぞれの辺の位置に扉、といった格好だ。白を基調とした洗練されたデザインで、扉にはそれぞれ別の色がついている。中央には巨大な転移装置らしきものが設置され、多くのヒトが出たり入ったりしている。そこからそれぞれの扉に向けて床に大きな矢印があり、施設への案内が記されている。内一つ、丁度ネロに向けて描かれている矢印には『リトルウイング事務所』と記されているのが見える。さて。

「えーっと、居住区は……」

……見つけた。丁度左隣りに当たる扉に向いた矢印に『居住区』とある。そしてその扉の前にかくびをしている赤いセーラー服を見つけて小走りに向かう。

「お待たせ、エミリア。」

「……あ、やっと来た！ちよつと、遅いよ!!ちやつちやと終わらせて、あたしは眠りたいんだから早く来てよね！」

「ごめんごめん、ちよつと長引いちゃって。」

やたら不機嫌なエミリアにやれやれと謝るネロ。まあ、待たせたのは事実だ。

居住区を表す緑色の扉の先は、落ち着いた霧囲気の小さなロビーになっていた。橙の優しい光源や、木目のある壁がどこもなくレトロな雰囲気を醸し出す。奥に扉が四つあり、それぞれAとDとアルファベットが振られている。自販機なんかもあるが、眠たげなエミリアは見向きもしない。

「エミリアもここに住んでるの？」

「おっさんと相部屋で、ね。」

苦虫を噛み潰したような顔で答えるエミリア。やはりよつぽど嫌いなのだろうか。

「保護者、なんだってね。クラウチさん。」

「ほんつとサイアク！グラールには何億つてヒトがいるつてのに、どうしてよりよつてクラウチさんなんだろう！」

……うーん、これは強敵だな…とネロは『お守り』という言葉を噛み締めるのだった。エミリアの方はしかめっ面をしながらCと刻まれた扉を開く。が、そこにはヒト一人分のスペースに小さな転移装置があるだけだった。

「入って起動して。あたしも後から追いかけるから。」

言われた通りにすると、ふわつとした、まるでへその辺りから宙に浮くような不思議な感覚の後、目の前の景色がスッと変わる。落ち着いた霧囲気のレトロなロビーは、これまた霧囲気の似た長い廊下になっていた。もちろん、景色が変わったのではなく、ネロが転移したのだ。廊下は左右にはずらつと扉が並べられ、番号が振られている。

シユーン!という音と共に、背後にエミリアが現れる。

「到着!ここが居住区!一部だけどね。……さて、あんたの部屋はつと……あつた!」

クラウチに渡されたカードキーに目をやりながら、金で『C-7』と刻まれた扉の前で立ち止まる。簡素な装飾の施されたスライド扉。果たして新米の自分に割り当てられた部屋はどんなものか、とネロが唾を飲んでいる横で、そそくさとエミリアがカードキーを通して扉を開いてしまった。

しばらく使われていなかったような香りのする部屋だった。この居住区の雰囲気は、どうやら先ほどから目にしてきたレトロなもので統一されているようで、優しい灯りと木の香りが(もちろん、木造ではないと思うが。)心地いい。大きな円を二つくつつけたような形で、手前側がリビング、奥が寝室となっているようだ。それぞれ二人は生活できるような広さになっており、一人部屋にしてはかなり広く感じる。……一体これはどういう待遇なのだろう、とネロは返って不安になって来た。

「これ、本当に僕の部屋……? いいのかな……」

「あたしが聞きたいよー! まったく、いきなり一人部屋なんてずるいったら……じゃ、使い方の説明、しとくねー!」

若干ふて腐れながらも、そういうところはきちんとしてくれるようだ。

「まあ、こんなところかな?」

「すごいね……なんでも揃ってるんだ……」

それはネロの正直な感想だった。広さだけではなかったのだ。台所用品や冷蔵庫、バスルーム、トイレ、ベッド等はもちろんのこと、全自動掃除機や洗濯機にパソコンなんかもある。さらに台所では美味しいコーヒーが淹れられるし、寝室には宇宙が一望できる大きな窓まである。何の準備も無く快適な生活を始められそうだ。

「あとはテキトーに使ってみるといいよ。その間、あたしは休んでるからさ。」

「うん。ありがとう! エミリア!」

「…………ふぁーあつ…………やば…………ホントに眠くなってきた…………」

よーし！まずはコーヒーでも…………と勢いづくネロ。だったのだが、ふと気づく。

…………誰かさん、休むとか眠いとか仰ってませんでしたか？

嫌な予感と共に振り返ると、そこにはベッドに横になるエミリアの姿が。もちろんそれ自体は問題ではない。ベッドとは、横になるために、寝るためにあるのだ。

しかし、それが男の自分が寝るベッドであった場合、どうだろう。というか、なんだってこの子はこんなは無防備なのだ。

「エミリアさん!? 一体それは何をしやがっておられるのでありませられるか!？」

意味不明な言語を口走る。心臓は倍速で活動中だ。しかしエミリアは動じる様子もなく、

「んにゃ…………プリン…ふふ…」

「プリン!?!ぷりん!?!」

落ち着け僕^{ネロ}。ただの寝言だしそれは食べ物の名前だ。ただ横になっただけだし、今だってただ寝返りを打っているだけだ。…………

おや? スカートの様子が…

「ぎ~~~~~~~~つと〜!」

ネロは全力で目を背けると、一目散に入口の扉を目指す。今日はよく変な夢を見るなあ!! そういうえばまだ社内をきちんと見てないしぐるっと回って頭を冷やそうしよう! などとあれこれ思案しながら扉に手をかけ、

「…………待って。」

それは、背後からの声だった。静かで、落ち着き払った声。エミリアのものとは似つかない。ネロの足が、手が止まる。当然だが、この部屋にはネロとエミリアしかいないはずなのだ。ならば、それなら、だとすれば、この声は…………?

ゆっくり、ネロは振り向いた。

思えば、これが、これこそが、本当の始まりだったのかもしれない。

7話 悪夢

振り返ったネロの視界は、つい先ほどと何も変わりはなく、やはりエミリアが寝ているだけだった。

「……誰？……エミリ、ア？」

ネロが部屋へ向け、静かに問う。幽霊など信じてはいないが、思わず身構えてしまう。否、やはりエミリアの声だったのだろうか？

「……でなら……二人で話が出来そうだから……」

ネロが飛び上がる。先ほど自分を呼び止めたのと同じ声。やはりエミリアのものではない。だが目を向けたことで情報が一つ増えた。口こそ動いていなかったが、エミリアから聞こえてきたのだ。ネロは左肩の長剣が収納してあるナノトランサーに手をかけ、またベッドへ向けゆつくりと歩を進める。

「話……って、何？あなたは誰……？」

そしてベッドの側まで来ると、奇妙な事象に気がついた。エミリアから光が漏れている。漏れている、が正しいと思う。粒のような光がエミリアの体のいたるところからスウツと現れるのだ。謎の光景を前にネロは恐る恐る手を伸ばしてみた。そして、

あつ、と手を引つ込めた。

漏れていた光の粒が突如集まり始めたのだ。はつきりとした一つの形を目指して。やがてそれは、ネロ自身ときほど変わらないほど大きな円を描き、縦に伸び、そして具体的な輪郭がつくられてゆく。

そうして集まっていく光から現れたのは女性だった。腰まであるブロンドの髪が美しく、色白の肌も良く映える。美形の顔立ちに抜群のスタイル、そしてそれを強調するかのような、金のドレス。きらびやかだが決してはしたなくない、そんな雰囲気は、エミリアには無い大人のそれである。知的で美人な大人の女性。ネロも思わずポカンと口を開けて見とれてしまう。が、我に返ってみれば、それが実体でないのがわかる。宙に浮かぶその体は、エミリアから映し出された立体映像であるかのようだ。……もしかして僕、本当に夢でも見ているのでしょうか。

「私はミカ。訳あって、この子に宿る意識のみの存在です。この姿も、状態も、すでに失われた古の技術によるもの。」

女性がゆっくりと語り始める。『失われた古の技術』という言葉が、ネロに先のレリクスを思い浮かばせる。一度唾を飲み込み、ネロも口を開く。

「意識、のみ……？古の技術、というのは……旧文明の……？」

「こちらではそう呼ばれているようですね。ですから、あなた方の言葉で言えば、私は『旧文明人』となります。途方もない過去に、この星を生きていた原初の文明を持ちうる人類。それが、私達でした。」

……旧文明。記憶喪失であるネロにはそれに関する大した知識もないが、どうやらその技術は、おおよそ今のものより優れていた、と聞いたことがある。故に研究が盛んなのだと。遺跡たる先のレリクスの調査も、その研究の為であったはずだ。その技術をもつてすれば、意識のみを他人に宿すことが可能、ということだろうか？信じがたい話ではある……が、信じなければ目の前で起こっていることが説明できない。判断を保留したネロは、気になるもう一つの点を質問してみることにした。

「……エミリアは？一体、どうなっているんです……？」

「疲れていたのでしょうか。今は浅い睡眠状態にあります。心配せずとも、すぐに目を覚ましますよ。」

「睡眠状態……眠っているだけだと？」

ミカがこくりと頷く。

「私はエミリアが安らいでいるほんの僅かな時間だけ、この身体をお借りしているだけです。」

とりあえず、エミリアは無事ということでもいいのだろうか。……信じて、いいのだろうか。するとミカは、一度息を吸い、

「この、些細な時間で構いません……どうか、私の話を聞いてください。」

静かでありながら、その言葉に力が籠る。全てがいきなり過ぎて、しかしだからこそ、返って信用できるとネロは思った。彼女には見えず知らずの自分に必死に訴えるだけの理由があるのだ。ゆっくり頷い

てみせた。

「ありがとうございます……この時代の背景などは、エミリアの記憶から把握させてもらいました。三年前、グラール太陽系を襲った危機。……『S E E D』の襲来。それは、私達の時代にも起こったことなのです。」

『S E E D』。三年前、外宇宙から飛来したという、謎の生命体。ウイリスのようなものを想像してもらえばいい。その被害は三惑星全土に及び、封印から三年経った今でも、爪痕が残っている。もちろんネロには一切記憶に無いが、それでも半年も生きていれば嫌でも耳に入ってくる。トラウマを抱えている者も少なくない。彼女達旧文明人も、それを経験している、ということだろうか。

「遙か昔、旧文明私達の文明が栄えていた時代。私達は、突如襲来したS E E Dにより滅亡の危機へと陥りました。長い長い戦い——私達はずでに、S E E Dの元凶の封印に成功しました。しかし、その頃にはすでに、三惑星の大地はS E E Dに汚染されており、回復は不可能な状態でした。」

そこでミカはまた一度息をゆっくり吸う。

「……そして、旧文明人の肉体もまた同じようにS E E Dに汚染されていたのです。」

ミカの顔が曇る。どうやらそれは、彼女の心にも傷を負わせているらしい。

「このままでは、星も人も滅亡するのは時間の問題でした。……そこで旧文明人は、賭けに出ました。大いなる時を越える『復活計画』を……実行に移したのです。」

語られる言葉は悲痛で、しかしそれだけではない、とネロは感じていた。語ることも憚られる何か……許されない何かを吐き出す苦しみが、その表情にはあった。

「まず、S E E Dに対する強力な浄化を、このグラール全てに対して行い、三惑星をよみがえらせ……次に、新たな『ヒト』の素体を造りあげ、それを大地に放ちました。そして、旧文明人は……汚染された自らの肉体を棄て、精神だけの存在となり、永い眠りについたので。」

「素体を造る……精神だけの存在となる……って、まさか！」

「そう……新たに造り出した『ヒト』が、高度な文明を築き上げたとき、『その身体を奪い、復活する』ためです。」

「それが……『復活計画』。」

「計画は実行に移され、創り出された『ヒト』たちは、高度な発展を遂げていきました。旧文明人の精神が眠る場所への……繋げてはならない道を開くことができってしまうほどに……」

「とんでもない話を聞いている、とネロは思った。彼女の話が本当なら、今を生きる僕達は……」

「……もう、お分かりだと思います。旧文明人によって生み出されたヒトとは、『ヒューマン』のこと。今、このグラールは……旧文明人の生み出した罠に狙われているのです。」

「僕達の体が……旧文明の人達に奪われようとしている……？」

「突拍子もない話、とお思いでしょう。ですが、いずれも事実なのです。……どうか、この忌まわしい計画を阻止するために、手を貸していただけないでしょうか？」

信じなければ、ミカが存在に辻褄が合わない。そんなことはわかっているが、やはりどうにも現実離れして信じていることができない。大体旧文明のことはよくわからないし、いまいちピンと来ないのだ。……しかし、本当だとすれば大変なことになってしまう。

「……エミリアは、このことを？」

「この子は……心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです。」

「……なぜ、僕にこの話を？そもそもなぜ、同じ旧文明人のあなたが、計画を阻止しようとするんです？」

「私は現代への回帰を望んでいません。私達は、滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです。……それに、貴方にとつては、すでに私の存在は他人事ではないのです。」

「僕にとって、あなたのことは無関係ではない、と？」

「なぜ、縁のないはずの私と貴方が、話すことができるのでしょうか……？そして、あのレリクスで自立起動兵器に襲われたのは、本当に

夢だったのでしょうか……？……貴方は、生きていますのでしょうか？」

ネロはハツとして、耳を疑う。

「あれは夢じゃない……？」

「……はい。貴方の肉体は、自立起動兵器に碎かれ、一度は完全なる死を迎えました。そのとき、エミリアの強い願いによって発現した私のプログラムが、貴方の身体を再構築しているのです。こうして話している、今も……」

ネロは頭が真っ白になった。確かに、夢であるとするのには疑問を持っていた。しかし、実際に死んでいたと告げられると簡単に飲み込めるものではなかったのだ。

と、静かに寝息を立てていたエミリアが、もぞもぞと動きながら欠伸を始めた。

「そろそろこの子が目を覚まします。詳しくはまたいずれ……」

そう言い残すと、ミカはまた光に消え、エミリアの中に戻って行った。申し合わせたかのように、エミリアがむっくり起き上がる。

「……ふあ、あつ。んー……ちよつと寝ちやつた、かな？」

エミリアと目が合う。パチクリするエミリア。しばしの沈黙。

「……あのさ、なんでこっち見つめてるの？」

あれ？…今の僕って危ないヒト？……何て説明すれば!?宿ってる旧文明人と話してたって？それは大変だ。医者でも紹介されてしまおうだろう。

「……えーつと、寝顔を……ミテマシタ？」

つていや！だからそれがマズいんでしょ何言ってるの僕!?

「ちよつ……！寝てるのに気付いてたんなら起こしてよー！」

あー、恥ずかし……と、エミリアが微妙に赤くなりながらやや俯く。……あれ？これってセーフ？ネロは適当に誤魔化して、その場を収めることにしたのだった。

「それじゃ、次はマイシップの説明かな」

そう言われてエミリアに連れてこられたのは、五角形の広場（エンランスホールというらしい）の中央転移装置から来れる大きなター

ミナルだった。様々な宇宙船が行き来し、様々なヒト達がごった返す物々しい雰囲気、ネロも少し圧倒される。

「……マイシップって?」

「社員に支給される小型の宇宙船のこと。たまーに自分で用意しちゃうヒトもいるみたいだけど。それ使って、このコロニーから任地へ向かうの。えーっと、あんたのはと……あつた、あつた。」

エミリアが駆け寄ったのは、どちらかというど戦闘機を思わせるような、白い機体だった。宇宙船としては確かに小型だが、周囲のものに引けを取らない程度の大きさはある。部屋のことといい、新入社員の僕に渡すには立派すぎるのでは。

「これが、僕の……?」

「うん。ヴィート・R927。旧型だけど、結構いいヤツだよ。」

「ビ、ビート?」

「番号は合ってるし、間違いないっしょ。とりあえず入ってみよ?」

連れられるがままに入ってみると、中は操縦席と様々な端末、モニターのある意外と広い部屋になっていた。

「ちよつと古いつて聞いてたけど、結構ちゃんとしてるじゃん。」

「操縦って誰がするの?」

「あんたに決まってるじゃん? まあ、ほぼオートみたいだから、心配しなくていいと思うけど。はい、マニュアル。」

そんな適当な!?なんて悲鳴を上げるネロに厚めのマニュアルを渡すと、エミリアが簡単な説明を始める。諸々の機器の操作や、通信のかけ方、地図の見方に食料についてなどなど。ひと眠りして元氣になったのか、エミリアはテキパキと説明していくが、いまいちネロは身が入らないでいた。連れられている間もずっとそうだったが、先ほど部屋で聞かされたぶつとんだ話が頭を占めているのだ。馬鹿げている、と思う。しかし、ミカの存在を疑うとレリクスでのことが説明がつかない。夢ではどうにも納得がいかないのだ。そして話の方を疑おうとすれば、嘘だとするならなぜそんな嘘を? しかも僕に? 一体どんな意図で? それに何より、脳裏に焼きつくあの言葉。『この忌まわしい計画を阻止するために、手を貸していただけじゃないでしょうか』

？』それは――

「ねえ、聞いてる？」

ネロがハツと我に返り、飛び上がる。

「もー、わざわざあんたのために説明してるんだよ？ 退屈なのは、わかるけどさー。」

「あー、いや、そんなつもりじゃ…」

「そういうえば、あんたの部屋出てから何か上の空だよー。何かあったの？」

……どう、する？ 話しておく、か……？ でも、なんて言えば……
すると、エミリアが急に赤くなって、

「もしかして、あたしが寝てる間に何かした!？」

「していないよ!! それとは関係ないっつら!!」

「……じゃあ、何なの？」

じとーつとネロを見るエミリア。仕方、ないか。ネロが慎重に言葉を選び、口を開く。

「えー……つと、ミカつてヒト、知ってる？」

「誰よそれ？」

「旧文明のヒト、なんだけど……名前だけでも、ほら、わかったりしない？」

「大昔に滅んだヒトの事なんて知らないよ。なんか、すごいヒトなの？」

余りの手応えの無さに唸るネロ。さて、どうしたものか。

「その、旧文明のヒトが、君に宿ってるって言ったら……どうする？」

「そんなわけないじゃん。それならなんであたしが気付かないのよ。」

「けど……見たんだよ。君から……「あー、もー。ヘンな出来事はあたしとあんたのレリクス体験記だけでじゅうぶーん！」

不愉快そうに話を遮るエミリア。感じることもすらできないものが、まして自分に宿ってるなんて、確かに信じられないだろう。

「きつとアレもソレも全部夢よ、夢ーレリクスでのことを思い出すくらいなら、仕事をしたほうが百倍マシ！」

夢。やはりエミリアはそれで納得しようとしているのか。それは

もちろん、ネロだってそれで済むならそうしたいところだが。しかし。

「はー……それにしても、今日はいろいろなことが一気にありすぎて、疲れたあ。」

……今は旗色が悪そうだ。確かに疲れたのも無理はないと思うし、ネロは一度手を引くことにした。

「はじめての仕事でしょ？いきなり事件に巻き込まれちゃうし、ヘンな夢は見るし……」

それも夢ではなかった。……実は自分は本当に死んでしまっていた。改めて思い返して、なんだかネロも溜め息をつきたくなってきた。当然エミリアには伝えることもできない。

「……ううん。細かいことはいいや。」

「エミリア……？」

「とにかく、あたしもあんたも無事だった、つてことが重要だもんね。」

エミリアが微かに笑みを浮かべて言う。そうだ、事実はどうあれ結果的に二人とも無事で脱出できたのだ。それも事実だ。……今はそれでいいか。ネロも少し、救われる思いで笑みを返した。すると、

「……で、さ。あの、あのときのことなんだけど……えっと、ええつとお……なんて言えばいいのかな。」

急にどもるエミリア。ネロも首を傾げる。

「その……あんたがいなかったらあたしはきつと、レリクスの中にならずと取り残されていたと思う。それに、何よりもあたしの言うこと、信じてくれたし……まあ、あれは夢だけどさ。」

でも、夢でも嬉しかった、と笑顔のエミリア。なんだか要領を得ない、とネロがきよとんとしている、

「……ちよつと、そんな顔しないでよ。言ってるあたしも恥ずかしいんだから……」

「え？……いや、だって何のことやら……だめだめ、ストトップ！あたしの話ばかりでずるいから、あんたのこともいろいろ教えてよ！」

「そんな、自分で勝手に話し始めたんじゃない……」

「なんてったって、あたしたちは『パートナー』なんだからね！」

どうにも自分勝手だ。しかし『パートナー』という響きはなんだか
くすぐったくて、ネロも自然と笑みがこぼれるのだった。

2nd universe 黒衣の破壊者

8話 初陣

「ハア！イー・グラールチャンネル5、ヘッドラインニュース。ニュースキャスターのハルです！今日のニュースをピックアップ！」

元気いっぱいノリノリミニスカニュースキャスターさんがVTRを出す。

「着工より2年。先月、ついに完成した『亜空間発生装置』の完成式典が、パルムの同盟軍本部で行われました。式には、亜空間理論を確立した、総合化学企業『インヘルト社』の『ナツメ・シユウ』代表取締役をはじめ……開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば……有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グラールが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究……絶対に、成功してもらいたいものですね。では、続いてのニュースです。」

グラールチャンネル5のヘッドラインニュースといえば、ニュース番組の中ではトップの人気を誇る、チャンネル5の顔である。今語られたニュースの内容だって、恐らく最も世界の注目を集めるものだっただろう。

そんなニュースも、民間軍事会社リトルウイングの社員、エミリア・パーシバルは全く興味がなかった。そもそも別にエミリアが見たくてモニターについていた訳ではない。こともあろうに寝起きにクラウチ行きつけの飲み屋のツケの催促を伝言され、気分サイアク（仮にも保護者なのだ。もっとしつかりして欲しい。）で事務所に来てみると壁のモニターについていた、というだけである。

ちなみに、見ていた当の本人である事務員のチエルシーは、「ノー！ニュース、それで終わりナノ？納得いかないヨー！」と内容に不満のご様子。確かに番組の方は別の話題（SEEDワクチンがもたらす遺伝子への副作用とかなんとか。やっぱり興味はない。）を始めてし

まったようである。傍でコーヒー片手にニュースを眺めているのはエミリアのパートナー、ネロ・ボーランだ。彼が入社してから三日が経つが、すっかり馴染んだようで、チエルシーとニュースを見ているこの光景も珍しいものではない。

さて、と。クラウチの所在をチエルシーに尋ねるつもりだったので、エミリアはとりあえず話を聞いてみることにする。

「おはよ、ネロ、チエルシー。……なんでいきなり怒ってるの?」

「ああ、エミリア。おはよう。それがね……」

「今のニュース、スカイクラッド社が出てないネ!! 亜空間航行の計画にイッパイ出資してるんだヨ! ウチのいい宣伝にナルと思ったのニー!」

「スカイクラッド社はリトルウイングの本社なんでしょう? リトルウイングの宣伝にはならないと思うけど……」

相変わらずキンキン騒ぐチエルシーに、なだめるネロ。まあ、どうでもいいや。

「あー、ハイハイ。それよりチエルシー。おっさん、いる?」

「あ、そういえば、シャツチョサンが二人に用があるって言ってたネ。ニュース見ていてすっかり忘れてたヨ。」

「ま、いいけど……奥におっさんいるんだよね。」

「自分のデスクにいるはず。そういうことなら僕も行くよ。」

「シャツチョサンのトコ行くならついでにコレもお願いネ。」

そう言っつて、チエルシーが小さな紙切れをひらひらとエミリアに渡す。領収書……? のようだ。

「なになに? ランジエリースポット、リッチベルベット。ダグオラ・シテイ店……」

限界を超えた怒りというのは逆にヒトを笑顔にする。

「……ねえ、このいかがわしい領収書はなに?」

「経費じゃ落ちないカラ自腹ダヨって伝えてネ!」

笑顔で問うエミリアに完璧な笑顔で返すチエルシー。隣でネロが溜め息をついた。

「あのエロオヤジ……! ツケの払い忘れだけならず経費のムダ遣いも

するか！」

「ハイ、文句は奥でネ！」

言うが早いのか、エミリアはドスドスと床を踏み鳴らしながらネ口を引き連れて奥へ向かう。あんなエロオヤジに振り回されるなんてアホくさくてやってられない。一刻も早くこのイライラをぶちまけるのだ!!……が、

「ちよつとおっさん!……つてうわ、酒臭っ！」

そんなエミリアの勢いは、クラウチのデスク周辺に立ち込める悪臭に遮られてしまう。

「よお、来たか。」

なんて呑気な容疑者だろう。エミリアが勢いを取り戻す。

「来たか、じゃないっての!いつもの飲み屋からまた電話来たんだよ!いいかげんツケを払って欲しい、つて!それにこれ!」

バン!と件の領収書をデスクに叩き付ける。しかし、クラウチは眉根に皺を寄せるだけで、

「ああん?こりやあ資料の経費じゃねえか。どうしてお前がもつてんだ?」

「こないかがわしいものが、経費で落ちるわけないでしょ!常識で考えろ、常識で!」

「ああ?バカ、わかってねーな。こういう根回しも必要なんだよ。……まあいい、それよりも仕事の話だ。」

まあいい、で片づけられた!まるで懲りてないよこのおっさん!!

「喜べ、お前たちにふさわしい仕事を見つけてきてやったぞ。」

「僕達にふさわしい、ですか?どんな仕事なんです?」

「ヒト探しさ。緊急かつ、重要な依頼だな。急ぎ、探して欲しいヤツがいる。」

「ヒトの搜索……?なにかの重要参考人とか、要人とか?」

エミリアも首を傾げる。そんなのあたし達に振っていいのだろうか。

「うんにゃ。俺が前に金を貸したヤツ。つまるところ、借金の取り立てだ。」

「依頼主おっさんじゃん！そんなの自分で探しに行け！」

「やかましい！どつかのタダ飯食らいがレリクスでの仕事をポカったから、ロクな依頼がこねえんだよ！」

「う……それを言われると……」

エミリアを打ち負かすと、今度はクラウチが一枚の写真をデスクに出す。クラウチのような色黒の肌、灰色の髪の毛の作業服の男が写っている。

「搜索対象者の名は『ワレリー・ココフ』。51歳、男性……人種は獣人^{ビースト}だ。こいつの船は、モトウブのクロウドッグ地方と場所が特定している。シティでもカジノでもなく……とてもヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。」

「場所までわかっているんなら、なおさら自分で行けばいいじゃん……」

「何か言ったか、ごくつぶし？」

「なんでもないですー！」

「座標のデータの方はお前らの船に送つといてやる。出発は…2時間後だな。それからネロ、お前さんにはこれだ。」

そう言つてネロに小さな端末を渡す。受け取つたネロの方は物珍しげに眺めると、

「これ、携帯ですか？」

「こっちは経費で落ちたぜ。さつそくパートナーカードを開いてみる……違う、メニューだ……ん、それだ。」

エアディスプレイが現れ、操作もそれを直接タッチして行うタイプの端末だ。おっかなびっくり怪しい手つきでネロがそれを操作していく。どうにかこうにか画面を開き、「えっ…」と驚愕の表情をつくる。

「これ、僕のパートナーカードじゃないですか！そんな、どうやって……？」

「昔の知り合いに、ちよつとな。顔写真と名前さえありやあ、ちやちやつとこのくらいはな。」

クラウチは得意気だ。いやつまり偽造だろそれ。ドヤるところじゃないよ。

「……おっさん、ネロにはなんだか甘くない？」

「ガキのお守り押し付けたんだ。このくらいは当然だろ。第一、無いと不便だしな。」

「ありがとうございます！エミリア、パートナーカード交換しようー！」
ネロもなんだか嬉しそうだ。そりゃあまあ、あたしだってこいつには感謝してるけどさー。

「その辺の操作は後でエミリアに聞け。じゃ、よろしく頼んだぜ。」

へーい、と適当に返事をして事務所を後にする。

「えーつと、惑星モトウブ。グラール太陽系第三惑星。豊かな資源を有しているが、自然環境は非常に厳しく、地表のほとんどの部分が砂漠で覆われている。人口の7割が獣人……」

ネロが今読んでいるのは、彼のマイシップ備え付けの端末からアクセスした、データベースの惑星モトウブの項だ。準備したはいいが、出発までまだ時間があるので、モトウブについて知りたいというネロにエミリアが出してやったのだ。

「ホントに何も知らないの？」

「一応初めて目を覚ました時にはモトウブにいたみたいだから、全く知らないって訳じゃないけどね。」

まあでもそれどころじゃなかったから、とネロはなんだかよくわからない笑みを浮かべている。

「そういうえば、ワレリー・ココフ…だっけ？そのヒトも獣人^{ビースト}だったよね。」

「そうだったっけ？まあモトウブなら不思議じゃないけど。なんで？」

「どうしてモトウブには獣人^{ビースト}が多いんだらうって思っただよ。」

時々真顔でこういうこと言われると、エミリアも正直驚いてしまう。あんなにしつかりしていて、あんなに強いのに。もちろん記憶喪失の彼には仕方のないことだが、こうも当たり前のことを尋ねられると、ちぐはぐな印象を受けずにはいられないエミリアなのであった。

「あんたの知識の偏り方、すごいよね……環境が厳しいからだよ。」

「……どういふこと？」

「だから、そもそも獣人^{ビースト}っていうのは、モトウブの厳しい環境でも活動できる奴隷として、ヒューマンの遺伝子を組み替えて生まれたの。今はそういう差別もほとんどないけど。その時の名残もあって、モトウブには獣人^{ビースト}が多いワケ。単純に、環境が厳し過ぎて他の人種には適さないってのもあるらしいけどね。」

「……その環境が厳しいところに、ヒューマン二人で行くんだね……」
「だよー。……せめていいところに着陸してよー。」

「自動操縦だからあんまり融通利かないけどね……って。」

と、ネロがなんだか訝しんだような視線をこちらに向けてくる。

「……エミリアも一緒に乗ってくの？」

「当たり前じゃん！パートナーなんだから。なんか文句ある？」

「いや、ないけど……てつきり君は自分のマイシップで行くものだと……」

「おっさんに連れまわされてたから持ってないんですー！」

「えっ、てことは、このヴィートって……」

「あれ？言ってなかったっけ？あたしと共用だよ？」

「えええっ！そうだったの!？」

「なんでそこでそんな驚くの!？」

「いや、別に深い意味はないけど……壊さないでね？」

「あんだ、あたしをなんだと思ってるの!？」

やいのやいのと言い争いを止めたのは、通信機から聞こえて来た
チエルシーの声だった。

『ハイハイイ、お二人サン。そろそろ時間ダヨー？目的地の座標入
レて、カタパルトに乗せてネー?』

「げ、チエルシー！もうそんな時間!？」

どうにも疎いネロにビシバシ指示を出し、どうにか発進準備を整え
る。……けど。

「カタパルト……って、これでいいのかな？」

『モウ少し右だヨー……ソウウ……ソウウ！オツケーネ!』

暗いトンネルのようなカタパルトにのろくさ操舵してどうにか乗
せるネロ。誘導灯が点灯し、視界の先に広がる宇宙空間に向け、まっ

すぐ光の道が描かれる。いざ、発S…

「あれ？自動操縦に切り替わらないぞ……？」

「え？ウソ、ちよっ『左翼第二カタパルト、ヴェート・R927、ハツ
シーン!!』」

「ちよっ、待っ…」

「ウソでしょ!?!」

「うわあああああああああ!!!」

たくさんの星々が見守る宇宙。その広大な宇宙に、あたし達はあわただしく、騒がしく飛び出したのだった。

9話 序章

「だから、悪かったって!」

「死ぬとこだったんだよ!」

「そんなこと言ったって、いい加減に説明したエミリアだって悪いじゃないか!」

「ネロがちゃんと聞いてなかったのが悪いんじゃない!旧文明人がどーのこーのとかわけのわからないこと言ってるよ!」

「そんなに言うなら自分で操縦すればよかつたじゃないか!」

「なにより!!女の子にやらせる気!?あんたって身長ばかりでかくて全っ然男らしくないよね〜!」

「それは今関係ないじゃないか!……はあ、もうやめよう。二人とも無事だったんだからそれでいいじゃないか。」

惑星モトウブ、「クロウドッグ」と呼ばれる地方。エミリアとネロはその目的地に辿り着いていた……。のだが。その道のりは宇宙船を自動操縦に切り替えられなかったことに起因する紆余曲折により散々なものだった。小惑星に衝突しかけた時等は死を覚悟した。ちなみに無事に辿り着けたのは、すんでのところで切り替えに成功した自動操縦オートパイロットの功績だ。そんな訳でエミリアは使えない運転手の方に絶賛クレーム中なのである。確かに操縦技術に期待などしていない。だが、切り替え方はちゃんと教えたしマニュアルだって渡したのだ。であれば快適とまではいなくても、安全がある程度保障された航路が約束されていたはずなのだ。目の前に小惑星が急速で迫ることも、迷って別のコロニーに着陸しかけることも無かったはずなのだ。だいたい!!

「その態度は何なの!?全然謝る気ないじゃん!納得できないんですけど!!」

「そんな、ちゃんと謝ってるじゃないか!これ以上僕にどうしろと!」

『うるっせえぞお前ら!!!到着したならとっとと仕事に取り掛かりやがれ!!!』

突如通信機から響くクラウチの怒鳴り声。やむなく一時休戦した

二人は洩々船を降りるのだった。

「惑星モトウブ」と聞いて多くのヒトが真つ先に思い浮かべるのは、「環境の厳しさ」、特に砂漠だろう。

しかしエミリア達が降り立ったこのクロウドッグ地方は、特徴的な草木の生い茂る、蒸し暑い熱帯雨林に覆われている。もちろん決して安全を意味するものではない。シティからも距離のあるこの地には、豊かな自然の中で育った、これまた特徴的で力の強い原生生物達がわんさかいるのだ。本来なら、ヒトがあまり寄り付かない場所なのだが……

「おっさんはへんぴな場所って言ってたけど、そのわりには観光プラント並に船が多いじゃん。」

船から降りたエミリアの一番の感想はそれだった。エミリア達が降り立ったのはどちらかというと岩場の目立つ開けた場所だったのだが、既にそこを埋め尽くさんとばかりに先客がいたのだ。形も色も様々な船たち。統一感の無いその様から思い浮かぶ目的といえば観光くらいのものだが、そんなに人気な場所だったのだろうか？

「こんないっぱいのなかからワレリーってヒト、探し出せるのかなあ？」

不快な暑さに袖をまくりながらうんざりして言う。ネロの方は色々の船が珍しいのかきよろきよろ見回し、

「随分あるね。両手じゃ数えきれない。手分けして片っ端から当たろうか。」

なんて言う。あーそーですか。やる気はあるんですか。暑さのせいか、はたまた取り掛からなければならぬ仕事の見えないせいとか、航路の一件はどうでもよくなっていた。しかし内容にうんざりする横で、変にやる気を見せられても文句を言わずにはいられないエミリアなのだった。

「ていうか、なんであたしたちがおっさんの貸したものの取り立てをしなきゃならないのよ……」

「仕方ないよ。僕達もまだ下っ端だし……」

「でもいくらなんでも私的過ぎない？経費だけじゃなくて、依頼まで

私物化しはじめてるよあのおっさん。誰か、ガツンと言ってくれないかなあ……」

「それもそうだとは思うけどね……なら、僕から言ってみようか？」
「べつに、止めはしないけど、効果ないと思うよ。あたしも言ったことがあるけど、まったく聞いてくれなかつたもん。」

いや、むしろあたしが言ったから、だろうか？それも仕方がないのかもしれぬ。クラウチにしてみればエミリアはお荷物にすぎないのだから。「ガキのお守りを押し付けた」と言い放つたクラウチの顔が蘇つて更にどんよりしてくるエミリアなのだった。

「あーあ、どうしたらあのおっさんは、あたしの話を聞いてくれるようになるんだろ……？」

「……この依頼を成功させてみる、とか？」

「ええ？そんなことであのおっさんが、急に態度変えたりすると思う？それに、あたしは戦うのとか苦手だし、調査とかも……キライだしや。」

つて、なんの話をしてるんだ、あたし。なんだか言い訳ばかり浮かんできて埒が開かない。

「それより、ワレリーってヒトを探さないと、またおっさんがうるさいだろうし……依頼をこなさないと、話すも何も無いよね。」

手分けしますかー、なんて話していると、

「おい、お前達。こんなところで何してるんだ？」

いきなり話しかけられ、エミリアは少し飛び上がったしまった。

話しかけてきたのは、エミリアより小柄な獣人の少年だった。否、少年ではない。ビーストという人種の身体的な特徴と言われて、肌の色や筋肉の分厚い体格を挙げるヒトもいるだろうが、それは他の人種のヒトでも備えている可能性があるわけで、見分ける部分として最も有力なのは、獣のような形の耳や鼻だったりする。そんな獣人という人種には小獣人リトルビーストという種類が存在する。大人になっても身長が150程度にしかならないというものだ。小柄でないとできない作業に対応するために生まれたとかなんとか。エミリアも一度子供と間違えて怒られたことがある。

今回間違えなかったのは、彼の目つき顔つきもそうだが、醸し出す雰囲気やベテランのそれだったからだろう。特有の黒い肌に緑色の目。尖った耳に猫のような形の鼻。短い金髪はかきあげて後ろに流してある。機能的で動きやすそうな服装から察するに傭兵だろうか。赤いスカーフがちよっぴりおしやれである。

「僕達、ヒトを探しに来たんですけど……」

驚くエミリアの横でネロが答える。

「随分と船が集まっているようですが……何かあったのですか？」

「俺たちも来たばつかで周辺を調べてるところだ。どうも、この辺りは誰もいないみたいだけどな。」

「……誰もいない？これだけ船が集まって、誰もいないの？」

エミリアも首を傾げる。すると、

「だめだよトニオ、こつちには人つ子一人居なかつたよ。そつちは……あ、二人見つけたんだ？」

話しかけてきた男性ビーストのやや後ろから、今度は同じくらいの身長リトルビーストの女性が駆けて来た。訝しむ様子でエミリア達を見ている。こちらビーストも恐らく小獣人だろう。だが色は白く黒髪で、あまり獣人っぽくはない。獣のような耳だけが獣人ビーストを主張している。やはりこちらビーストもかなり機能的な服装で、額のバンダナがちよっぴりおしやれだ。髪は上の方でツイントールにしてある。

「残念だが、こいつらは違う。今来たばかりの同業者だ。ヒトを探しているらしい。」

頭を掻きながらトニオと呼ばれた男ビーストが答える。どうにも話が見えない。エミリアはとりあえず、今現れた彼女が何者なのか尋ねようと思い、手で示して問う。

「あの一、こちらは……？」

「おっと、そういや自己紹介がまだだったな。俺は『トニオ・リマ』……フリーの傭兵だ。」

答えたのは男ビーストの方だ。やはりトニオというらしい。

「あたいは『リイナ・リマ』。夫婦で傭兵やってるんだ。」

こちらはもちろん女ビーストの方。なんとなく察しはついていた

が、しかし夫婦で、しかもフリーの傭兵というのはかなり珍しいケースなように思う。……まあ、エミリアのような歳で傭兵をするのも珍しいには珍しいので、ヒトの事は言えないが。

「あたしたちは、リトルウイングって会社の社員です……一応。あたしはエミリア。こっちはパートナーのネロ。……えっと、あんたたちもヒト探し？」

「俺たちは、文化保護地区の見回りを頼まれてここまで来たんだよ。」
「ぶんかほごちく？」

ネロが隣で首を傾げる。エミリアにもそれが何を意味するものなのかはわからない。呆れたトニオが溜め息をつく。

「おいおい、そんなことも知らずにここまで来たのか、お前達？」

「駆け出しだから仕方ないんですー！」

「この森の奥の方に『カーシュ族』っていう部族の集落があるの。文化保護地区っていうのは、そういうところへ必要以上にヒトが立ち入らないようにするための制度だよ。」

むくれるエミリアにサバサバと説明してくれたのはリイナだ。

「なら、ますます誰もいないというのは不自然ですね……船もこんなにくさく泊まっているのに……」

聞いていたネロが冷静に分析する。確かに、理由はどうあれ、人気だからこそその立ち入り規制である。ましてこれだけの船があつて誰もいないというのは不自然でしかない。すると、トニオがニヤリと笑って、

「……なるほど、勘は良いみたいだ。」

感心の声を漏らす。リイナの方は深刻そうな顔で、

「なんだか気配も異様だし、原生生物もやけに凶暴だった。奥で何か起きてるのは、間違いなさそうだよ。」

と見回りの結果を話す。エミリアは何だか嫌な予感がしてきた。行方知れずのヒトを探しに来てみたら、この有様である。となれば件の「ワレリー・ココフ」とその「森の奥の何か」が重なって見えるような気がしてならない。

「なんにせよ、奥に進まなければ見回りもヒト探しもできねえしな。」

目的も一致してるようだし、しばらく俺達と組まないか？」

……そんなことになるような気がした。もちろん、こうなった以上組むべきだろう。あーあ、ただのヒト探しがどんどん大事になってる気がするよ。うんざりしながらエミリアはネロに目配せをして、答えた。

「わかった。一緒に行こ。」

「よし、決まりだな。」

「とりあえず『カーシユ族』の村まで行こう。そこに行けば、何か手がかりがあるかもしれないからね。」

リイナが方針を提案する。エミリアも賛成だ。目的地も設定せずこんな広大な熱帯雨林を探索するのは無謀だし不可能だろう。だが。

「村つて、道はわかるの？」

「カーシユ族は、土地を転々と移動するから、はぐれていた仲間がわかるように森に目印を残してるんだよ。あたいはあらかじめ学んできたから、それをもとに辿ればすぐさ。」

へー、どんなのだろう、とエミリアは適当に相槌をうつ。それならひとまず安心か。いや、凶暴な原生生物ひしめく熱帯雨林に突入するわけだから、結局エミリアは不安なのだが。

こうして一行は、リイナが先頭に立つ形で森の中へ入って行ったのだった。

10話 獣人

「……ねえ、本当にこっちで合ってるの?」

「さつき見回りしてたときに一つ見つけたんだ。方向は合ってるから、もう少し頑張つて。」

疑問の声を上げたエミリアをなだめたのは列の先頭に立つリイナだ。まあ他に頼れるものも無いし、とエミリアもそれ以上は黙ってついていく。

草木が擦れ合う音や独特の青い匂いに囲まれる熱帯雨林、その中にエミリア達はいた。時折響く獰猛な原生生物達の声のエミリアをなじる。おまけに不快な蒸し暑さに支配されており、エミリアの体力はまだ10分程しか歩いていないが、着実に奪われていた。大体、こんな中では、目印も何もないのではないかとエミリアは止めどない不安に溜め息をつく。そんなエミリアを見かねたように、

「水飲む? エミリア?」

「うー、のむ……ありがと、ネロ。」

「モノメイトもあるよ。」

「うえ。それはいらない……ってか、あんたもよくそんなの食べる気になるよね……」

モノメイトは、いわゆる携帯食料の一種で、『飲むゼリー』のような食べ物だ。傭兵などが現場で手軽に摂取する為に生まれたもので、当然栄養などは豊富に含まれているようだが、何分エミリアは味が好みではない。何とも言い難い薬品臭さが苦手なのだ。しかしこれは稀な例なようで、

「おいおい、それでも傭兵か? モノメイト食べねえ奴なんて聞いたことねえぞ。」

というトニオの非難も珍しくない。というか、一応でも傭兵なエミリアで言えどもともである。とは言え、言われっぱなしも癪だ。

「だってまずいじゃん! もっと色んな味でつくってくれればいいのに。」

「好き嫌いは激しいし、体力はねえし、ネロも苦勞するよなー。」

「え？ああ、いや、僕は別に……」

「何よ。こいつだつてさつき宇宙船で……」

「そういやネロ、さつきから思ってたんだが……お前どつかで会ったことないか？」

ト二オが軽い調子で話を変える。エミリアも軽く抗議してみたが聞いてくれる気配は無い。

と、一方ネロはこれが一大事だったようで、

「え!?今なんて!?!」

珍しく取り乱して、素っ頓狂な声を上げるネロにエミリアも驚く。

「僕にあつ、会ったことが、……見覚えがあるんですか!?!」

「お、おい、落ち着けよ。どうしたんだ、急に。」

「ごめんなさい、でも、いやそんなことより!あるんですか!?!僕の顔に見覚えが!?!」

「いや、だから俺が質問したんだが……思い出せねえんだよな。見た覚えがあるような……そのオッドアイ、コンタクトレンズで色を変えてるのか?取ればわかるかもしれねえ。」

「……これは、裸眼らしいんです。珍しいけど、天然の目の色素だそうで……」

「マジかよ!?!……いやわりい。それなら多分、俺の知り合いじゃねえな。」

「そんなんっ……もつとよく見てください!!ちよつと見かけた程度でもいいんです!!」

「いや、だからわからねえよ。さすがにそんな珍しい目の奴がいたら覚えてるさ。少なくとも俺の知り合いにはいない。」

「ですからっ……いや、そうですね……急にすみませんでした。」

ト二オにきつぱりと言われ、肩を落とすネロ。無理もない、とエミリアも思う。だつてネロは……

「ハア……」一体なんだつてんだ?尋常じゃねえ雰囲気だったか……ワケありか?」

「実は……ネロ、記憶喪失なの……半年前より以前のこと全然思い出せないんだつて。」

意気消沈してしまったネロに代わってエミリアが答える。答えながらエミリアは思い知らされた。ピンと来ていなかったが、ネロは自分が何者なのかすらわからないほど記憶が無い。それなのに一人で半年程も生きて来たのだ。その孤独は、そしてエミリアはそれを突き付けられてなお、寂しいと思った。あたしは、こいつのこと、何も知らないんだ。

「記憶、喪失……そうか。いや、悪かった。そんなつもりはなかったんだ。でも……」

「お取込み中のところ悪いんだけどね……ちよつと、加勢してもらえないかい……?」

おずおずと割って入って来たのはリイナだ。エミリアもハツとして辺りを見回す。そういえば、やけに周りが静かになった……?

「う、嘘でしょ……?この、まわりでにらみをきかせてるの、全部この原生物……?」

妙に丸っこい影がいくつも周囲に並び、それぞれが黄色い目を覗かせている。そしてその奥にはもつと巨大な何かが潜んでいるようだ。獲物に狙いを定めて息を殺すその様が、エミリアに嫌な汗を吹きださせる。

「あたいも気づくのが遅れたよ……どうもヴァンダの群れに目をつけられたみたいだね。しかも、あの奥の方で睨みをきかせてるでかいのはドルア・ゴーラだ。二人とも、戦える?」

「う、うん。多分、どうにか……」

「僕も、大丈夫です。」

ネロも、先程かなりショックを受けたようだったが、打って変わったはつきりと答えた。いつの間にか既に彼の長剣が握られている。エミリアも慌てて長杖、クラーリタ・ヴィサスを取り出す。

「状況が悪いな……ヴァンダくらい大したことはねえが、数が多い。しかも囲まれてるときは俺が切り込むから、3人はそのサポートを頼む。」

自分の鋼爪を取り出しながらトニオが指示を出すと、リイナが黙って頷き、ネロが首を鳴らしながらはつきり返事を返し、そしてエミリ

アは（そんなつもりはなかったが）蚊の鳴くような声で「はい…」と返事をした。

鋼爪は腕に装着する手甲のような武器で、先端から腕と平行にフォトンの刃でつくられた鉤爪が伸びている近接武器だ。動きを阻害しづらいため、機動力が自慢の肉体派には好む者が一定数いるという話だったが、当然使ったことはおろか触ったことすらないエミリアには、長剣ソードの類と何が違うやらさっぱりである。結局「腕を振り回し」て「切る」武器だ。トニオはそれを右手に装着すると、一度それを水平に振り抜き、

「じゃあ……始めるぜ!!」

と鼓舞するように言い放つと群れの中に飛び込んだ。待つてまじと潜んでいたヴァンダ達が一斉に飛び出し、吠える。さらに応じるようにトニオの後ろから飛び込んだのはリイナだ。

現れたヴァンダは（エミリアも初めて実物を見た）二本足で立つ平たい顔の猪のような姿の生き物だ。天を突く下顎の立派な牙と、手の甲から伸びるこれまた太い角が特徴である。

「エミリアは僕の後ろに!」

続いてネロがそう叫んでエミリアをトニオ達と自分で挟むように押しやって、背を向けて立つ。四人の背後から迫るヴァンダを迎撃する構えだ。パツと目で数えられないほどのヴァンダが飛び出す、しかしやはりネロの方が速く、その実体剣が数回閃いたかと思うと、一斉に細切れの肉片になってしまった。

突っ込んでいったトニオの方はと言えば、こちらにも身軽に立ち回ってヴァンダ達を翻弄し、襲い掛かるその角を的確に躲し、切り裂いていく。その背を狙うものをこれまた的確に捌いていくのは、片手剣セイバーを手にしたリイナ。そして戦場の中央で完全に置いてけぼりになったのがエミリアである。そもそも戦況は圧倒的で、エミリアは自分が手を出す必要性をあまり感じていなかった。そうは言っても戦闘は戦闘。本人たちは命がけだ。指を啜えて見ているのはあまり虫の居所がいいものではない。たつぷり数十回『戦わなくっちゃ』と自分に言い聞かせ、汗でじつとりしてきた手で長杖ロッドを握り締め、構えた。幸い

今回はその構えに根拠がある。一つだけとは言え魔法マジックを覚えた今、この長杖ロッドも鈍器などではないのだ。頑張れあたし！見よ、世紀の大魔法！！

「炎よ！！」
「フオイエ」

振り抜いた長杖ロッドが通過した目の前の空間が熱を帯び、炎が飛び出す。

「いっけー！！」

しかし、生まれた炎は、かの巨大自立起動兵器スタテイリアの頭を吹き飛ばしたものは比べ物にならないほど小さく、衝突した一匹のヴァンダが「ぐぎゃっ！」と声を上げ、転んだだけであった。やったぜ世紀の大魔法。

「下がってて、エミリアー！」

足手まといと言わんばかりに声をあげたのは、その転んだヴァンダごと周りの個体まで一振り（に見えた）でズタズタにしたネロである。エミリアの心も一緒にズタズタだ。

エミリアがいじけている間にも、前で荒らしにかかったトニオ達のおかげでヴァンダの方はあらかた片付いたようである。その奥で、静観していたドルア・ゴーラが一頭。

ドルア・ゴーラは巨体だ。竜の頭を持つワニといった見た目をしており、硬い皮膚とズラリと並んだ鋭い歯が特徴である。だが本当に危険なのはその顎ではなく…

「危ないトニオー！」

青ざめて叫ぶリイナ。

「ドルア・ゴーラの口から火が！！」

しかしそれも時すでに遅し。ヴァンダの乱戦からじつくりと狙いを定めていたドルア・ゴーラは、口に大量の炎を蓄え、丁度小獣リトルビースト一人を飲み込む程の巨大な灼熱を吐き出した。振り返るトニオ、手を伸ばすリイナ。

「エミリアアア！！！」

ネロが目を配せて叫ぶと、真っ白だったエミリアの頭が働き出す。が、あたしに止めろっての!?

否、考えている暇は無い。もとよりあたしには……!!

「ええい、これしかない!!フオイエ炎よ!!」

無我夢中で杖を振る。あたしの貧弱な火の玉でも、ぶつけて少しでもあの炎を弱めることができれば……!

が、杖の通過した目の前の空気から、ゴオツ!!と生まれたのは爆炎だった。先程のヴァンダを転ばせた火の礫などとは比べ物にならない。巨大自立起動兵器スタテイリアに放った火球よりも更に大きい。小さな太陽が目の前に現れたように、エミリアは自分の肌がひりひりするのを感じた。

「いける……!!お願い、トニオ達を守って!!」

呼びかけに応じるように爆炎はドルア・ゴーラの火炎と衝突し、相殺してみせた。爆音が轟き、ドルア・ゴーラがひっくり返る。

「す、すげえ……今の、本当にエミリアがやったのかよ……?……つと!」

自分が命の危機に曝されていたことも忘れ、目をまん丸く見開いて立ちすくんでいたトニオだったが、ドルア・ゴーラが元の姿勢に戻って一度吠えたのを合図に我に返って構え直す。しかし、ドルア・ゴーラがその目で睨んでいるのは……

「えっ……?あつ、あたし!?!」

言うが早いのか、標敵を変えたドルア・ゴーラはもう一度吠えると土煙を上げ、エミリアめがけ突進を始めた。あつという間に心臓が早鐘を打ち始める。エミリアはもう一度長杖ロッドを握り締め、

「や、やってやろうじゃん……みてなさい、フ……」

と、するつ、と手元が狂い、エミリアの長杖ロッドが地に落ち、カランカラン、と音を立てた。迫るドルア・ゴーラ。う、そ……あたし、死んだ……?……

「俺を無視とはいいい度胸だ。」

そして、ドスツ、と、

突進が止まった。否、止められた。

間に割って入った、トニオによって。

「う、受け止めた!?!」

トニオは小柄である。なんならエミリアよりも小さい。その彼が、巨体ドルア・ゴーラの鼻つ柱に食らいつくように組み付いている。異様としか言いようのない光景だったが、実際にドルア・ゴーラはそれ以上トニオを押し潰すことも、振り払うことも出来ずにいた。両者に一層、ぐぐぐつと力が入る。ドルア・ゴーラが唸る。そして、

「ビースト獣人を……舐めるんじゃないやねええええ!!!」

ぐりんつ、と巨体が捻られ転がる。鱗の少ない腹を曝したその姿は、もはや抵抗のできないことを意味している。

「今だ、リイナア!!」

「はあああああつ!!!」

気づけばトニオの背後に控えていたリイナが、すかさずその手の片手剣で切りかかり、その首を落とす。そのコンビネーションももちろん大したものだが、分厚い皮膚を貫いての一振りである。自らより一回りも大きい巨体をも平然と転がし、切り飛ばす怪力。今なおこの惑星モトウブに多くが住まう人種。

「これが……ビースト獣人……」

それは、エミリアの口から自然と漏れた呟きだった。

「大丈夫か、エミリア?」

「う、うん。ありがとう。……でもまさか、あんな大きいのを一人で投げ飛ばしちゃうなんて……」

「ちよつと小さいからって舐めるなよな。あのくらいなら屁でもねえぜ。」

「何言ってるんだか。エミリアがフオイエで助けてくれなきゃ危なかったじゃないか。」

胸を張るトニオをやれやれ、とたしなめるリイナ。なんとなく、エミリアは羨ましいと感じていた。

「けど、ビースト獣人って本当にすごいんですね。あんな力比べは僕にはできませんよ。」

後方で戦っていたネロも戻って来た。

「お前だって、記憶が無いってわりには中々の戦いっぷりだったんじゃないやねえか?……エミリアもありがとうな。リイナの言う通りだ。」

フオイエ、助かったぜ。」

照れたように笑うトニオ。…そうは言っても無我夢中だったし、その後のトニオとリイナがすごすぎて全くお礼を言われる実感がないのだけど。

「しかし、ドルア・ゴーラはともかく、あのヴァンダって生き物はあんなに好戦的なのでしょうか…あまり戦闘馴れたようには見えなかったのですが……」

ネロが口到手を当て、呟くように言う。

「言ったでしよ。原生生物がやたら凶暴だったって。…早く奥へ行って原因を…あ、ほら見て！」

そう言ってリイナが指さしたのは、何の変哲もない…否、何か文字のようなものが刻んである岩だった。

「…なにこれ？何か刻んである……？」

「カーシュ族の目印だよ。刻んであるのは彼らの文字。ちょっと癖のある文法をしてるけど、あたいは一通り勉強してきたから、一応読めるはず…えー、『我らが一族に道を示す』…これだけ？」

首を傾げるリイナ。トニオが後ろから声をかける。

「わかりづらいけど、この岩の向こう、道になってるな…こっちへ行けってことじゃねえか？」

しかしながら、エミリアはリイナが読んだ目印の方が気になっていた。…これがカーシュ族ってヒト達の文字。恐らくそれぞれが意味を持っていて、でも象形文字っぽくはないんだよな…だったらいや、なんにせよ、これだけじゃ短過ぎてわからな…

「エミリア？」

「へっ!?…な、なによネロ？急に話しかけないでよね!!」

「いや、だから先へ進もうって…」

集中すると周りが見えなくなるのは、全くもって、あたしの悪い癖である。